跡見学園女子大学紀要　第十二号（一九七九年三月二十日）

上野本　毎月抄聞書

――紹介と翻刻――

川平　均

〈紹介〉

はじめに――『毎月抄』註書の意義

『毎月抄』については、従来、これを藤原定家真作の歌論書と考えるかそれとも偽作・仮托の書と見做すかをめぐって、内部外部の様々な徴証をもとに論争が展開されてきた。当然ながら、当の論争史の過程を仲媒として、その歌論書としての内容吟味が推し進められ、定家歌論とどのように関わらせて読むべきか、ひいては歌論史にどのように位置づけるべきかをめぐって、より精緻な読解がなされつつあるのは周知の如くである。そして近年、久保田淳・藤平春男両氏による注釈作業[1]が各々公刊され、一方書誌的調査に立戻っての論[2]も現れている。それら従来の研究を踏まえて『毎月抄』の追究は更に進められて行くであろう。

本稿で採り上げるのは、その『毎月抄』全文に註解を施した江戸中期の書で、仮に「毎月抄聞書」と呼ぶ一本である。本書は言わば『毎月抄』享受史の近世における一資料と考えうる註書であって、その註文内容は、中世歌論と言うよりむしろ近世歌論の問題に連なるものではあるが、先程述べた通り、精細の度を深めつつある近代の『毎月抄』の読みを補完する為にも、本書を参看することの意義は少なくないと思う。ここに紹介と翻刻を試みる所以である。

『毎月抄』の享受

そもそも『毎月抄』の姿が歌論書類に最初に現れるのは頓阿の『井蛙抄』である。それを初めとして、中世、一定程度流布していただろうことは窺い得るものの、『近代秀歌』等の定家真作と見做し得る書や、中世特に重んぜられた一連の仮托書群の享受に比して、『毎月抄』享受の実体は必ずしも明らかでなく、そこに真作偽作論争の行なわれる理由も

存したのであった。無論『毎月抄』諸伝本に見える転々書写の間の奥書は流布と享受の様を示すものではあるが、歌論内容がどのように享受されたかという意味での中世における『毎月抄』享受史は解明されていないと言うべきであって、それは問われるべき一つの課題である。近世に至って、例えば細川幽斎の聞書を録した『聞書全集』には、『毎月抄』の記載の引用が見られ、幽斎は門弟と歌話を交す折に『毎月抄』に直接触れまた問題にすることのあった事を知りうる。(3) ただし更に広く『毎月抄』が流布するのは、その板本の刊行された後であったろう。『和歌六部抄』(承応年間版)やそれを吸収した『和歌古語深秘抄』(元禄十五年版)版)の刊行と流布とは、例えば本稿で紹介する如き書の生まれる場を用意したのだと言えよう。しかしながら『毎月抄』自体を註釈の対象とした書というのは、中世・近世を通じて余り例を見ないようである。ここに紹介するのは上野理氏の蔵に架かるものであり、他に伝本の存在を聞かない。ただし『国書総目録』の掲げるように、類似の書として『毎月抄註』(静嘉堂文庫蔵本のみ)の存在が知られる。同書は江戸も末期、加藤古風の手になる註書であるが、上野氏蔵本とは別の書であり、相互に無関係であると認められる。右の『毎月抄註』は形態上興味深い本であるがその検討は他日を期すこととして、本稿では特に触れない。

上野理氏蔵本「毎月抄聞書」の概要

本書はもともと『和歌六部抄』全体を講尺した一連の内で(上野氏蔵書中にはその内『正風体抄』の註に相当する一冊も存する)、一冊全て『毎月抄』の註に充てられている。内容は、百花菴春山の講尺を門弟の栗山満光が編録したもので、註というより厳密には講尺聞書と呼ぶべきであろう。「毎月抄聞書」の名は私に称した。『毎月抄』全文の原文を適宜分けて掲出し、各々の後に春山の所説を載せてある。折々筆録者たる満光自身の私記をも加えてあるが、それらは講尺部分の後に付記されていて弁別し得る。本書の基にした『毎月抄』本文が六部抄のそれであることは、端作りや付載されている奥書(六部抄所収の毎月抄の奥書――いわゆる二条家系統本奥書)により明らかである。おそらく板本を基にしたのであろう。本書の成立は、奥書の記載から、宝暦六年(1756)と知り得る(翻刻参照)。

さて春山の所説の特徴につき大まかに述べると、まず門流の意識の色濃く現れている点を指摘できる。冒頭部分で、「冷泉流義」と対比して自己の見解を示している所から知られるように、近世二条派の立場での説である。春山自身、武者小路実陰門にあったとされる(後述)ことからすれば当然の事態であろう。ただし二条家説や師説などを、例えば伝受などの形で継承するという面は表立っておらず、概ね春山自身の見説といった趣で述べられている。当の内容は原文の釈義を主とすると言ってよい。時にそれは煩瑣に傾きがちであるという面は否めず、原著に対する独創的ないしはクリティカルな姿勢は稀薄だと言わねばならないが、それを取るに足らぬ妄説と見做すべきではなく、逆に、原文の具体的かつ忠実な読みそのものが近代の読みを細部において点検・検証する上での媒介となるであろうことは、先にも述べた通りである。

講尺者と筆録者について

百花菴春山と栗山満光とについては、従来知見少なく、『大日本歌書綜覧』により、両者の閲歴の若干と著作のあらましとを知り得る程度である。それによると、春山は堺の大安禅寺の住持で武者小路実陰の門下。満光はその門弟で、堺の人、始の名新七、春秋庵と号した。春山の著作に『初心和歌道しるべ』『藤川百首註』があり、満光は『百人一首諸抄異同辨疑解説』『梁塵愚案抄百花師説』を著している由である。両者の伝記や文学的事蹟につき充分な調査をし得ていないので今は報告を控えねばならないが、ただ両者の関係等について、一二、右に記した知見につけ加えて紹介しておきたい。

歌書綜覧に拠れば、満光の著書は知られる限り全て師の春山の説を継承して成ったものであること、また春山の著作も何がしか満光の関与の窺えること等を知り得るが、それらは、満光は春山の最も信頼した門弟であったことを示していよう。それを少し具体的に裏付ける資料として次の二つを参照しておきたい。

1 『松浦の紀行』

この書は『国書総目録』に春山の著作として掲げられている。春山自記の極く零細な紀行文[4]であって、宝暦四年八月、住吉社に詣でたのち、難波津を船出して「松浦潟なる故郷」へ到る旅の様を記した一文である。その中に満光の名が見える。出発に際し別れを惜しんで満光が春山に贈った歌、また満光の家で盃交しつつ行なっている両者の贈答などは、師弟の親密なつながりを思わせるし、とりわけ春山は満光に留守の間の「うしろみ」（後見）を托したらしい物言いの見られるのは、春山の満光への信頼を証するであろう。

2 『百花菴秘記』

この書は和歌に関する春山の説の伝書[5]である。折々「満私云」として満光の私記が付記されている事は「毎月抄聞書」と同様、ひいては先に挙げた満光の著作の成り立ち方と等しい傾向を示すものである。また本書の奥には春山の門人某による宝暦十二年の書写奥書があり、その中で満光を「道統之逸宗」と呼んでいる点に注意したい。満光は師春山はもとより広く門人達の信任厚い人物だったのであろう。

「毎月抄聞書」はこのような春山と満光との信頼関係がもたらした書であるとも言えよう。なお上野氏蔵書中には（先掲の）『和歌道しるべ』の一本も含まれている[6]。同書には春秋庵（満光）の奥書が見え、また巻頭には百花庵の道統を証した一文を掲げてある。これらは百花菴の立場や江戸中期泉州堺の一禅寺に集う和歌的小サークルと呼ぶべきものの様を幾分伝えてくれるので、併せて紹介する[7]。

（巻頭の一文）

我師百花菴春山蘭長老禅師は、はやふより和歌の道に心さしふかくて、童形の折は十二才かつくし肥の国肥前国鍋島丹後守家臣也鍋島の家につかへて氏は志阿氏とかや聞へし哥の道を専らもて遊ひ給ひし也、鍋島の守和歌の道に心ふかくて、中院通茂の卿の御門人となりて古今御相伝也通茂公の御息女を乞受、御

簾中にし給ひしなり、古今御伝授の為にとて、家臣の聴松庵主人、此道の功達なりけれは、通茂卿に随身給仕せさせて鍋島氏は将軍家参勤彼是事しけれは、みつから通茂卿に御相談なりかたきゆへ、此聴松庵を中院家に給仕せさせて、二条家御一流之口決秘密読くせ不残御相伝有しと也、二条家御一流の奥旨のこるかたなくうけ伝へ給ひける也武家に古今伝有しは鍋島家・備前少将殿二人也、此已来武家伝の事制禁有て、今は改不叶と也、されはわか師の主聴松菴を師として螢雪の勤怠りなきうへ、鍋島家の四天王と称せられし一人の人也、才学気憶世に二なかりけれは、聴松菴主人ことに愛憐ふかくて、中院家相伝の御口決とものこるかたなく伝授し給ひける也、先師、聴松庵没後は、中院家通躬公の御添削を蒙り、後に武者小路実陰公准大臣、号起嶽(超カ)院、当代哥道秀逸の人也、霊元院御門人、古今伝授、中御門院・桜町御所二代の御師範也に気色ありて添削を請、諸抄口決の再談有しとなり、されば我師の伝は二条家の正道なるもの也、星うつり時去りぬれは、其よしし人もまれ〳〵に成行ぬへけれは、御存生の今承り置侍るまゝを書しるし侍る事、我師の御なかれをくみ伝へん人のみなかみをいふかりまとふ筋も有ルへからんものをやと、後のあらそひをしりそけ侍らんために、此はしかきに出し侍りぬ、

（奥書）

于時寛延二己巳(1749)年四月廿三日記之畢／泉州堺南荘大安寺蘭長老／百花菴春山師／末弟／春秋菴

右大安寺ハ禅院也、本山ハ五山之内京都恵日山東福寺／之末寺也、御朱印地也、御朱印寺領廿九石計也、／泉州踞尾村之内領地也、

書　誌

本書は縦25.2cm横18cmの袋綴。表紙は薄藍色の楮紙。同左上題簽に「和歌庭訓抄　全」（ただし「和歌」の二字部分は後補）と書く。本文用紙は楮紙。一面十～十二行書。註文を原文より三字下げて書く。墨付九十二丁。全体に朱で合点・みせ消ち・振り仮名等が施されている（本文と同筆カ）。奥に宝暦六年の栗山満光識語を持つ。満光の筆蹟として確実なものを他に知りえないので断定はできないが、書写型式から、満光のノートを基に別人が書写したかと推測される。ちなみに、本書の筆は前に挙げた上野氏本『和歌道しるべ』のそれに酷似する。

翻刻にあたっては、底本の仮名・漢字・異体字・略字等を現行文字に改め、また私意に句読点（、のみによる）を付したが、仮名遣・送仮名等は底本のままとした。更に底本にある濁点・捨て仮名・振仮名、『毎月抄』掲出本文に施してある。印による区切り点や。ニ印による清濁表示等は、『毎月抄』原文をどのように読んでいたかを示す証ともなるので全て底本通りとした。必要な箇所には私見を（　）中に傍記した。丁の表裏の変り目を｜を付して示した。また底本は言わばノート性の濃いものであって書写型式の不揃いな所も多い。それらは私意をもって統一して翻刻した。(8)

〈註〉

1　久保田淳氏校注は『歌論集㈠』（「中世の文学」の内 昭46・2 三弥井書店刊）所収。藤平春男氏校注は『歌論集』（日本古典文学全集50 昭50・4 小学館刊）所収。

2　高梨素子氏「毎月抄の伝来考」（『国文学研究』第六十一集 昭52・3）。同氏「毎月抄の校本」（同上第六十二集 昭52・6）

3　すぐ後に述べる和歌六部抄の成立に幽齋が関与していることを考えれば、これも当然の事象であろう。なお土田将雄氏『細川幽齋の研究』（昭51・2 笠間書院刊）257頁参照。

4　国会図書館蔵『扶桑残葉集』八（わ・918・2・8）所収本文による。

5　早稲田大学図書館蔵（へ2・1704）。

6　百花菴関係書としては先掲の『正風体抄』の講尺聞書や『詠歌大概』（六部抄には含まれないが）の講尺聞書も蔵される。

7　同本は春秋庵本を同門の藤井高賢なる人が寛延四年に書写した本である。紹介した一文や奥書の後の勘註は右の人物の手になるかとも思われるが、

体裁から満光の記したものと推測される。

8 しばしば「瑞成聞書云」として記載されている箇所の見られるのは、春山の講尺の最終日に満光は欠座した為、同門の半井瑞成なる人のメモをもって補ったという事情（満光奥書参照）によるのだが、満光は当の欠席日の分のみでなく、他の分についても改めて瑞成メモにより補充している。結果、記事に重複も見られるけれども、聞書ノートを丹念に整備しつつ師説を忠実に継承しようとする満光の姿勢はよく現れている。

〈翻刻〉

和歌庭訓抄（題簽）

六部抄第三

和歌庭訓抄一名毎月抄トモ

此書は衣笠内大臣実家公のもとへ書令遣せられし抄也、此内府は定家卿門人三人のうち也。第一の門人は鎌倉右大臣源実朝公右大将頼朝ノ息、頼家ノ舎弟、鎌倉三代ノ将軍也、第二常盤井相国実氏公と云、次に此内府也衣笠殿ハ西園寺ノ流義也、当代此家ノ後ナシ、此内府ノ後ニ断絶也、続後撰に内大臣基と有るは此人也、此当代に当官の内府二人おはしたり、一人は此実家公、一人は内大臣為家公、鶴殿ト称ズ、後京極の摂政良経公の息也、是続後撰集には内大臣家と有り、一オ但シ続古今ニ前内大臣基トアルハ格別ノ人カ、此続古今ニハ衣笠内大臣、又、光明峰寺入道、前摂政左大臣ト入ル、シカレバ此続古今ノ内大臣トアルハ余ノ人也、

和歌庭訓といふ題意は、和歌は此国の風俗として神代よりのことはさなり、されは代々の帝も是をもてあそひて勅撰し給ひて、其時代の国風をも考み給ひける也、尤国政の基とせる処也唐朝詩経のことくなるへし、庭訓とは、にはのおしへと訓して、人に教ゆるのことはさなり、父の子に教へ師の弟子に教ふるかことし、鯉走過レ庭、庭訓とは、聖人孔子の語に、鯉趨而過庭、曰、学語也乎、未学、曰、人而不学詩則如牆面而立云々と論語に於て子をいさめ給ふ語より庭訓としるし給ふ也、古へは親にものをならふ事をも庭訓といふ也、又師匠にものをならふをも庭訓といふ也、一ウ

是より先に、和歌の十躰なと書付て遣せられし事有ゆへに、此抄に其十躰の事くはしく書かすと有る也、唯歌の稽古すへき要を教へ給へる也、凡二条家一流は、みなもと柿本と人丸をもとゝして、其骨肉を伝え来る所、紀貫之是也、貫之より同息紀望城、北山尼是貫之ノ孫娘也、それより金吾基俊伝授有て、さて俊成卿皇太后宮ノ大夫、或五条ノ三位トモ、法躰已後法名釈阿、又ハ五条ノ禅門トモ云、後鳥院哥道ノ師範也、定家卿、為家卿　為家御子左ト云、是二条家ト云、為相為家ノ次男、是ヲ冷泉家ト云、冷泉ノ一流ハ為家ノ後妻、安嘉門院ノ四条ノ局、阿仏ノ尼ト云、此阿仏尼ハ為相卿ノ実母也、為家卿没後、母ノ阿仏一流ヲ立テ、息為相ヲ冷泉一流ノ祖トシラレシ也、此阿仏尼ノ記文、いさよひの日記・よるのつるナト、テ述ノモノアリ、則よるのつる、此六部抄ノ第五ニ相加ルトイヘトモ、冷泉流義ノモノナレハ、二条家ニ不用、依之六部抄トイヘトモ、残リ五部ノ抄取用之事也、六部抄トハ、二オ第一和歌式、定家卿作、是ハ鎌倉右大臣殿ヘ被遣書也、第二和哥正風体抄、定家作、第三和哥庭訓抄、定家卿作、衣笠内府ヘ被遣書、則是也、第四和哥口伝、或ハ詠歌一体トモ云、為家卿作、第五よるのつる、阿仏尼作、第六近来風躰抄、後普光院ノ摂政良基公作、良基公ハ二条殿ノ先祖也、頓阿ト哥道ノ相伝ニテ、中古哥道再興ノ人也、如斯相応して今二条家御一流となりたる也自是先ニ四条家大納言公任ノ麁流、又六条家修理大夫顕季、此ニ流有トイヘトモ、哥道正義ヲ不存事粗有リ、依之相廃レタリ、サレハ俊成以来、定家・為家ト重代シテ、万代哥道ノ家ヲ定メラレタリ、尤矩模ノ事也、

此六部抄より先に、古来風体抄俊成卿作とて俊成卿の作し給へる書あれとも、此六部の内に入らさる事は、俊成卿撰集の千載集の頃まて、三代集古今後撰以来風義異体になりて」後拾遺より金葉・詞花、此三代次第に陵夷せし也、侍るを、俊成・西行二人、古風を存してよみ直し給ひたる時代、此古来風体又桐ノ火桶、俊成卿作なといへる書あれとも也、其異体を正風に直せる頃ゆへ、述作のものも此古来風躰、きりの火桶なとの事也、きとしたる家の正本にあらさるゆへに、除れたる也、されは家は二条家也、俊成卿よりおこりて、道は定家卿より定りて、家の式目制禁全く備りたるは為家卿より伝れり、かゝれは定家卿を当道中古人丸・貫之以往の開祖と尊ふ事也、其御一流をくみて歌道を学ん人は、先此六部抄に心をよせて正しき師伝を得て自得すへき事也、」

毎月の御百首よく〳〵拝見せしめ候ぬ。凡此たびの御哥ざま。誠に有がたう見申候へば。をろかなる心にもかたじけなき仰のいなみがたさばかりをかへり見候とて。わづかに。先人の申置し。庭訓のかたはしを申さふらふべき

此まては此書の発端にして、序文なとのやうの心に見給へし、是よりだん〳〵此道の庭訓の意を述給へり、発端、毎月の御百首を拝見とあるにて、此時代の哥道の執学なる事をおもふへし、ヶ様に毎月不闕に百首を詠せらるゝにて、道の執心は顕はれたり、又ヶ様に執し思ひて学ひざれは、歌道も得がたく秀哥も詠じ出る事はかたき事也、末学後生の人、能〻可眼付詞也、凡此たひ、凡とは、上の語を分て改て云出るやうの心、かく毎月」の御百首を拝見したるうへにて、さて此度の御百首の御詠作を考へ見奉るにとの心也、まことに有かたう見申候とは、先〻の百首よりは哥もすゝみて、宜様に見ゆるよしの心也、おろかなる心にもとは、定家自身の卑下謙退の詞也、かたじけなき仰のとは、此時には、かたじけなきといふ事、かしこまり入るよしの心也、いなみがたきは否の字にて、爰にてはさりがたき心也、わづかにとは、こと〴〵くはとの心也、かたはしばかりのよし也、先人さきの人とは、御父俊成卿の事をさしての給ふ也、俊成卿の定家卿へ哥道の事しか〳〵と教訓し置給ひしとの心也、その庭訓のかたはしをあら〳〵申上へしと也、是迄発端也、

さだめて後の世のわらはれぐさもしげうさふらはんなれども。さすがに其跡とやらんと。御哥もことの外によみつのらせおはし」まし候へば。かへす〴〵本意に覚させ給ひて候。

定て後の人といふより是迄を一段とみる也、定めて後世のわらはれぐさもしげう候はんなれともとは、是も謙退也、後世の嘲りをのこすへき種ならんなれともの心也、それをわらはれ草とはかき給ひし也、草はくさばひとて物の種也、是もわらはるゝくさはひならんの心也、諸草とも此種より発生して草ふかくしけるものなれは、くさはひもしげうと也、さすかに其跡とやらんと、定家卿みつから俊成卿の跡そとの心也、是重代の哥道の家といふ心也、是二条家の流義之事也、此監の鰐はまへに記し侍るゆへ略也、右重代の家の訓へと御聞なされて御けいこゆへ、御哥も殊之外によみつのらせ給ふとの心也、此文さすがに

其跡とやらんと御哥とつゝきたる文面、何とやらんつゝかさる」[四ウ]やうに聞ゆれとも、其何とゝやらんと御聞なされて御稽古ゆへといふ心を此文中にこめてみれは、文面明らか也、かくよみつのらせらるゝか定家の心に彌〳〵此道の本意と思ふと也、覚えさせ給ひて候とは、定家卿の尤におもふとの詞也、貴人へかきてまいらせらるゝ故、みつからおもふといふ事を人のうへのやうにあがめて、覚えさせ給ひ候と書れし也、

抑。哥はたゞ日頃しるし申侍しごとく。万葉よりこのかたの勅撰を見かへして。代〻にかはりもてゆき候すがたどもを。御心得候へ。それにとりて。勅撰の哥なればとて。かならず哥ごとにとりて学ふへからす候。人にともなひ。世にしたがひて。哥の興廃見え侍り。万葉集はげに代もあがり人の心もまして。此世にはまねぶとも及ぶべからず。ことに初心のときをのづからも。」[五オ]古き躰を好む事有べからす

抑といふよりあるべからすといふ迄を一段としてかける也、抑とは、今まて云たる事を打捨てものを立かゆる所に用る詞也、哥と申ものは、かねてしるし出して遣られしことくそと也、只は唯只の二字は余縁のかゝすとて、其一つのものにことものを交る事なきよしの心也、万葉よりこのかたの勅撰を見返してとは、返す〳〵とくと見返しての心也、時代の風義のかはり、哥の善悪を考ふる事也、既に万葉已来、古今・後撰・拾遺の三代は代あかり、人直ほにて、哥も正風を存したる也、後拾遺・金葉・詞花等の集は異躰の事こも〳〵交り詠して、道既に陵夷したり、是邪路に入たる也、此邪正を考正して正風を学ふへしとの心也、勅撰といふは天下おしなへて高」[五ウ]貴卑賤を論せす、よろしき哥を撰ひて入るゝ天下の清撰なり、普く天下の哥をあらひ残さざる事也、此勅撰の集共にも哥くすの哥もあれは、よきうたをよく見分けて稽古せよと也、人にともなひとは、小人に伴へは小人の心、聖人に伴へは聖人の心をつぐ、それかことくに正道を能存したる能先達宗匠にしたかひて、正風を学ふへしと也、あしき師にならへはおのつから邪路に入るよし也、又は正邪相交へて学ふ人もあれは、それを能見別してならへと也、哥の興廃とは、正路なれは道おこり、邪路なれは必すたり行也、世にしたかひとは、其時代によりて其風に随ひてよむべしと也、万葉集は大古の集にて尤上代にて、人の心も高く直に増長して（ましては、増長の心也）今の世には学ぶとも及ふべからざるとの心也、然とも此万葉も集の根源とはいへとも、善悪の」[六オ]差別を論ぜす、只ものとして詠したるものを悉のせ入られたり、先躰も長哥より短哥・旋頭・混本等の様〻の異躰混雑すれは、証拠にはならぬ也、大古万葉の頃は、長哥をもとにして三十一字の詠を反哥（ハンカ）とて此長哥のおくに詠して、三十一字の哥はかたはらにせられたり、さやうの差別しかと立さる集故、上古根源の勅撰といへとも、当流其趣を用ひさる事なり、古今に貫之か真名序に、三十一字之詠今反歌之作也とありて、卅一字の哥はむかしの反哥なれ共、是を今の基とするとしるされたり、ことに初心のとは、今更の心也、初心の時、心速くす早に心を用ひてよみならふ人をいましめられたり、此初心のときには、万葉の上古の風は中〳〵及はねは、万葉なと心かけて学ふは無益の事にして、却而邪路に

趣くそと也、」六ウ

万葉は哥の撰集のはしめのものといへとも、邪正のわかちなく多方のはり紙に有ていをあけて撰せるものにして、いはゝ記録もの也、先長哥・反哥・短哥・折句・誹諧・混本・施頭（ママ）等、或は無心所着等迄かそへ上けて、哥の正邪の差別なき集也、仍而二条家一流には、古今を以て基とする也、又万葉には秀哥も有り、やさしき詞もあり、たけき詞もあり、よむましき詞あれは、初心の中〳〵其善悪を見分て学ふ事たやすからす、仍而初心に被制之也、近代は三十一字の哥をのみおもにせり、是万葉の古しへにかはりたる也、長哥は五七五七〳〵とつゝけて長く詠する也、詩にていはゝ七言律・五言律の如し、三十一字の哥は詩にては絶句の如し、」七オ

但稽古年かさなり。風骨よみ定りて後は。又万葉の様を存ぜざらん好士は。無下の事とそ覚え侍る。けいこの後よむべきにとりても。心有るべきにやすべてよむまじき姿詞なり。

但しかくいふは初心の人に対しての事也、又稽古熟して年功をつみつる上は、万葉の趣をしらずんは有べからすと也、清輔の朝臣は、いさ内裏の晴の御会といへは、万葉ならてはとてよく〳〵思惟して、万葉を本としてよまれたると也、尤けいこ達したる上にて万葉をとる事也、又とりなしに大事ある事也、万葉を心にいれて、其古躰をはなれて心斗をとりて、心詞かけさるやうにうるはしくよむやうの心得すへしと也、此古躰を」七ウ見分る事は、かねてよく稽古定り多年心をとめずは、しかと其躰は見分けがたかるべし、大事也、此塩梅をえ弁へぬるには用捨有事也、此集には惣してよむましき姿詞とものあるぞと也、此見別なきほどは却而邪路に入る端そとの心也、」八オ

よむまじき姿詞といふは。あまりに俗（ゾク）にちかく。又恐ろしげなる類（タクヒ）ひを申へし。宜しくそれをは今定め申に及ばず。此下にて御料簡さふらへ張紙

よむましき姿詞といふはあまり俗にちかく又おそろしけなる類ひを申へし、あまりに俗にちかくとは、彼万葉の中に、くそぶな・くそかづらなとゝいふ類ひなり、糞鮒（クソブナ）とは、夏の頃田の溝畦の中へ糞（コエ）を落しはる、其所に出生したる鮒の事也、くそかづらとは、俗にへぐそかづらといふ葛也、何の益にもたゝぬかつらなり、又おそろしけなる類ひとは、同し万葉の中に、すへらきは神にしませば天雲のいかつちのうへにいほりするかも　是等の類ひなり、

上の段に、すへてよむましき姿詞なりと有に付て、其よむましき姿詞といふは如斯の事共ぞと」九オ の示教也、先あまりに俗にちかくといふは、へくそかつらといふものをは、くそかつらとよみ、又はくそ鮒（ナ）とよみ、或はみな人のほりするときは大便を通するやうの心也なとの詞、返す〳〵上古の歌といへとも俗態の事なれは、是を用ゆへからすと也、すへて是等の類ひの詞不レ可ニ毎計（アケテカゾウ）一、能酔酌（ママ）すべしと也、又おそろしけなるたくひとは、いかつちのうへに庵りさすかも、なといふやうの事也、いかにいへはとていかつちのうへに住居をしむるなとの事あまりなる上、恐ろしけなるつゝけから也、是等の躰の事多くあれは、了簡して取用ひよと也、此二件のたくひの事」九ウ 兎や角と今あらたにそれはよし是はあしゝと悉定（クサダ）むるにはあらすと也、此委細の意趣は

此下りを見よと也、

此百首に多分。古風の見え侍るうへから。ヶ様に申せば。又退屈や候はんすらんと存ずれども。しばし構へてあそばすましきにて候。今一両年はかりも。せめてもとの躰をはたらかさで。御詠作あるべく候。

此百首に万葉の躰の哥多く交りたる故、今しばらくは万葉の躰は猶予なさるへしと也、只今にては早卒なりと也、是未時至らされは用捨あれと也、ヶ様に申せは相支へるやうに思召て御退屈も出侍るへけれと、時熟せされは」却而邪路に入るとの用意の示教也、されは是迄の御詠作の通りに御よみすへ有度也、しばしかまへといふ詞を、稽古年重りては又といふ詞にかけて見るへてし、せめてもとの姿を働かさては、是迄よみならはせられたる風にて御よみあれと也、

もとの姿と申すは勘へ申候ひし十躰の中の幽玄様。事可レ然様濃様。有心様。是等の四にて候べく候。

もとのすかたと申は勘へ申候ひし十躰、此詞にて此書よりまへに十躰を書て遣せられしやう見ゆる也、先に勘へ申候所の四つの躰、是より哥の躰を述られたり、先」幽玄躰とは、俤かすかに心ふかく心詞優に聞ゆる様の躰也、俊成卿好みてよみ給ひし也、　ましてきえなん露の夕くれ　なとの姿なるへし、事可然躰とは、ふとみほそみもなく欠たる所なきを申す、濃躰とは、余情こもりてこまかに気を付てよみたるやうの躰成へし、有心躰とは、心正しくそゝろかす心深き様の躰なるへし、何にも此躰あらざらんは哥の本意ならずと也、

張紙ニ瑞成聞書ニ長高様・見様・面白様・有ニ一節一様抔やうの躰は、

長高き躰はよみ出かたき様とそ、清輔朝臣はつねに長高躰を心にかけてよまれしと也、寂蓮は一ふし長高き躰をよまんとてつよく案したるゆへ、あまりにあんし過して却而長下き」躰をもよまれしと也、又折によりては一向長高き躰も読れし也、

かつらきや高間の桜咲にけり龍田のおくにかゝる白雲　寂蓮

俊成卿は常に長高躰を好み給へり、鎌倉の右府殿は自然と歌のやう長高く直なるうたをよみ給へり、拉鬼躰を得られて、人丸の骨法を得給へる天然の哥仙也、此右府殿の歌の様は及はれす、自然の生得の事也、見様躰とは、眼前に見ゆるやうの躰也、たとへは垣ねにさける卯の花、軒のしのふなとの類ひ也、面白き様は、さてよんだりと人のいふほとのうた也、一節有躰は、稽古のすくれたる所見ゆる躰也、濃躰は、前にも見へたり、是等の躰は何時にても出さねはなら」ぬやうの躰そと、師説、

此躰どもの中にもふるめかしき歌どもはまゝ見え候へども。それは古躰ながらも。くるしからぬすかたにて候。たゝすなほにやさしき姿を。先自在にあそばしたゝめてのちは。長高様。見様。面白様。有一節様。濃様。なんどやうの躰はいと安きにて候

先達書遣せられし十躰の中にもとの心也、其中に古めかしき歌ともはまま見ゆれとも、それはくるしからぬすかたぞと也、まゝとは、間の字也、あひだ〳〵に見ゆれともの心也、此等の類ひのうたは古躰にみつからは思へども、古躰ならぬも」あるへしと也、稽古のうへにては新古の差別みゆれば、稽古の後、了簡せよと也、あそはしたゝめて

とは、只直に正風の趣をよく練磨し、自在をうるほとに道を得よとなり、さてかくしてのうへは、長高躰・見様〻・面白様〻・有一節様〻・濃躰〻なとをもうかゝひよむに、いと安くよみ得らるそと也、はじめは幽玄と事可然と有心と三つを教へ、爰にては四躰を教へ給ふ、長高き躰

ものゝふのやなみつくろふこてのうへに

鎌倉右大臣は末代の人丸とも申たると也、又寂蓮も此躰を執しこのみてよまれたると也、又見様の躰、是は眼前にみるやうによむ躰の事也、面白躰」一二ウは、いかにも感心して、さてよみたりと見ゆるやうのてい也、有一節躰は、人にすくれて一ふしある所を案し得てよめるうた也、濃き躰はまへにしるしぬ、くはしくは十躰の和歌といへるものあり、それにて考へしるへし、右の品〻も、稽古至りての後は更にかたき事なしとなり、

拉鬼躰そたやすく学ひおほせかたう候。それも練磨の後。などかはよまれ侍らざらん。かやうに申せばとて。かならず拉鬼様か歌の勝れたる躰にてあるにては候まじ。さるから。初心の時はよみがたき姿にて侍るなるへし

拉鬼躰とは、力量にてをしひしく計に見ゆるやうに」一三オ骨強く心たくましくよめる躰なるへし、此躰は中〳〵不堪の輩の得よみえざる躰也、通具・通光・雅経・家隆等の人〻、是等の躰をえられしと也、俊成卿は只幽玄を好みて、いかにもやさしくあはれふかくしなしてよみ給へり、公任・経信なとは、又拉鬼躰をよまれしと也、

新古今　浅茅や袖にくちにし秋のしも忘れぬ夢を吹嵐哉　通具

続古今　ものゝふのやなみつくろふこてのうへにあられたはしるなすのしの原　鎌倉右大臣

うかりける人をはつせの山おろしよはけしかれとは祈らぬ物を　俊頼

小初瀬や嶺のときは木吹しなり嵐にくもる山もとの里　定家

以上拉鬼躰也なるへし、それも練磨の後とあるは、此拉」一三ウ鬼躰もかくは申せとも、よみえられすといふ事なしとなり、

きえ佗ぬうつろふ人の秋の色に身をこからしの杜の下露　定家

なと也、しかしケ様に申せはとて、此拉鬼躰の必哥の最上といふにはあるへからすと也、かならすとは、是に限るといふ様の心也、さるから、さあるからの心、左様にはあるからの心意也、

先歌は。只和国の風にて侍るうへ。先哲のくれ〳〵書置けるものにも。やさしく物哀によむべき事にそ見へ侍る。けにいかに恐ろしう物遠きものなれども。哥によみつれは優に聞なさるゝたくひそ侍る。それにもとより。やさしき花よ月などやうのものを。おそろしげによめらん」一四オは。

何の詮か侍らん

瑞成聞書云　先哥は只和国の風（ハリ紙）にて侍るうへ

和国といへる、和はやはらく也、唐天竺の堺は、摂臺（セッタイ）抔といふ類ひの官人をすへをきて治る、あら〳〵しき仕業也、日本は天照太神のしろし召御国故、女神の御姿を風として治め給へる国ゆへ、和国とも云、哥を和歌ともいふ、又やまと哥、大和歌也ともいひて、やはらかによ

むへき事、神代より此国の風姿也、是によりて世〻の先哲、此趣をもて要と教られたり、

先歌といへは只和国の風にて侍るとは、此国の風俗に」(一四ウ)して、唐土の詩のことくこは〳〵しくはよむへからずと也、和国とは、和はやはらぐの心也、天竺には此間ヲチ本ノマ、唐土には帝堯なと儒文を教へて物ことかたく、帝位とても女のしろしめす事希也、日本は和国にて物こと和を以て貴しとする国也、先天照太神を初て、神皇(ママ)后宮・持統・孝謙・推古・元明・元正なとゝて、女帝の代をしろしめしたる事多し、国の風也、是此国の風なれは、哥は和らかに美しうよむ事ぞと也、此是神趣古来の先哲の示し教へ置かれしと也、されはうたはやさしく物哀によむへしと先賢教へ置れし也、やさしく」(一五オ)もの哀にとは、女の姿なとのやうに和らきてよめとの事也、されはけにいかに恐しう物遠きものなれとも、けにはまことにの心也、まことにいかに恐ろしう物遠きものとは、人のつねにもてはやさざる狼(ヲホカミトラ)虎熊猪の類ひ、惣してあらましきはげしきものは好みてよむべからずと也、但(シ)かやうのものも、猪をふするゐの床なとゝやはらかになしてよめよと也、たとへは大友の皇子のたけき軍を退治して、天武・持統なとの御代しろし召たることく、たけきを平らけて、和らきたる女帝の世を治め給へるか如く、うたも又如斯そと也、此心をうけて次の詞に、それに」(一五ウ)もとより艶しき月花なとゝ出たり、此心は、或は花の哥よまんとて今一ふし珍しけをそへんとては、花の陰に名もしらぬおそろしけなる獣をそへてよみ、狐狸梟の類ひをもとりそへてよみ、又月のうたよまんとては、異様のすけなき気形のものを好みすへてよめらん類ひ、是等の事は好みて何の所詮なき事そと也、

さても此十躰の中に。いつれと申すとも。有心躰に過て。歌の本意と存せる姿は侍らす。きはめて思ひえがたう候。とざまかうざまにては。つや〳〵つゝけらるへからず。よく〳〵其心をすまして。其一境に入ふし」(一六オ)てこそ。まれによまるゝ事侍れ

さてもとは、さありてもの心也、此十躰の中にも、就中有心躰か哥道の本意そと也、此躰を過て外の躰を本意とは思はさる事とおもへとなり、きはめて思ひえかたきとは、本意の正路に心かけて、本心の哥をよまんと稽古練磨しても、其間にとやかくと心散乱して、本心には思ひ極めかたき事そと也、とさまかうさまとは、兎に迷ひ角にまよひて、すぐ〳〵と本心をとりたてゝよみかたしと也、つや〳〵つゝけらるへからすとは、つや〳〵は、安くはつゝけかたきとの心也、心安くえ安く能書のものかくに、筆とりてさら〳〵と端的に走蛇の形勢をかけるかことくの業は出来かたし、わか道もよくけひこ達し練磨おほすれは、此能書の走蛇破竹の形勢をなすも又何のかたき事かあらんの心也、此自在を得ることは、よく〳〵其心をすまして其一境に入ふしてこそは、又〻希によまるゝ事のあるそとなり、此よく〳〵心をすましてといふ、此詞大事也、禅定に入るかことく三昧に入るかことくして、観念をこらしすまさすしては、此佳境妙境には入るへからすと也、定家の卿はつねに天台の止観を存し給ひし人也、此止観の心にて稽古有しと也、止観明静に止りて哥三昧に入給ひし也、ケ様にせねば其一境に」(一七オ)

は入かたきぞとなり、其境に入ふしてこそ希によまるゝ事とは、此境に入ての後は、又希〻に秀歌はよまるゝ事ぞと也、入ふすとは、只無余念して哥三昧になりて思惟極り自在を得たる上にても、秀哥はたやすくは不詠出、希有の事そとなり、秀哥とは世に秀たる所の歌也、秀は秀歌大略・百人一首是等前代の秀哥とも也、

されは宜き歌と申すは。哥ごとに。心のふかきをそ申しためる。あまりに又ふかく心を入れんとて。ねぢ過せば。入れほがのゐか。へり哥とて。堅固ならぬ姿の。心えられぬは。心のなきよりもうたてう見くるしき一七ウこ」とにそ侍る。此境はゆゝしき大事にて候。猶〻よく〳〵勘酌あるへきにこそ

されはとては、さあれはの心也、右にいふ宜き哥のてひをあらはされたる也、此宜き哥といふは、毎首心ふかう姿高くそゝろかずして感情のあるうたなるへし、かういふやうの哥をよまんとて、あまり又ふかく沈思し趣向をとやかくとすれは、却而心がうかれるやうになりて、きとしたる旨はわきになりて、無正躰事出来て、彼無心所着の躰の哥の出来るそと也、それを入れほがのゐかへり哥といふなり、ヶ様の堅固ならぬ姿の心えられぬは、中〳〵心のなき哥よりも一八オ」却而うたてしくも見くるしくも覚ゆる事ぞと也、此善悪の見別する事はゆゝしき大事ぞと也、此境といふ事は、前に教られし有心躰と此いかへり歌と、又正路に詠し習しと此歌を考へて、いかにも正路に稽古して有心躰をまなふへき事そと也、ゆゝしきといふ詞、哥にてはおそろしきといふ心也、ヶ様に大事にかけておそろしく思ふて、心を切にして学ふべしとの示教の辞也、されは此さかひを彌〻能〻分別して、其悪しきを去（べ脱）り、よきにもとつく勘酌のあるへき事なれは、そこを分別（フンベツ）して学ふし（カ）と也、

此道をたしなまん人は。かりそめにも執する心なくて。等閑一八ウ」によみすへる事侍るへからす無正躰哥よみ出して。人の難をだにをひぬれは。退屈の因縁ともなり。又道の毀廃ともなり侍るへきにこそ

此道とは、哥道をさしていへる詞也、たしなまん人とは、哥を好みて詠し稽古せん人の事也、かり初にも執する心なくてとは、かりそめとは仮令と書、たとひ只かり初にもの心也、ふとした事にもしかと心をすへて、かういふ事はいかにそれは何とかと、須臾も思ひわすれず、わつかの事といへども心を用てふかく道に執する心もなふ等閑にやりすてにけいこし、とかくの思量なくほが〳〵と思ひ出るまゝ云出るやうの事にては一九オ」無正躰の歌をよみ出して世のわらはれとなり、人にあらぬ難せられなとしては、稽古しすゝむへきと思ふ心もそぞろうせて、是か退屈する初因縁となりて、終には此道の毀廃とてやふれすつる根さしとなる程に、大事にかけてならへよと也、等閑とは、哥にてはかいやり捨るやうの心也、まへにいふことく、哥の稽古はヶ様に心得て学はねは大事なるほとに、なをさりに打やりに稽古すへらかすと也、必打やりにけいこするから、折ふし麁忽なる歌をもよみ、又無正躰哥も出くれは、人に難せらるゝほとに、とくと心得て大事にけいこせよと也一九ウ」

されは或は難を負はてゝ思ひ死にまかり成したくひも聞え侍り。或は。

秀歌をまろなからとられて侍るが。没して後。其人の夢に見えて。わが歌かへせと泣てかなしみけるによりて。勅撰より切出しける事も侍にや。かゝるためし是にかきらす。誠にあはれにそ覚侍る

されは、さあれは也、此段は前段の、人に難をおひ又等閑にけいこして無正躰哥をよみて、といへるにかけて見るなり、昔もかく難をうけて死し、又は我歌とられて死後に霊の歎きたる例もあるそと、稽古の人に示教也、思ひ死にまかると」は、おもひ死に卒去する事也、是は藤原長能の歌に、於花山院詠三月尽和歌二云、

心うき年にもある哉廿日あまり九日といふ春は暮ぬる

此歌講する時、四条大納言公任云、春は卅日やはあると云に、長能此後此事をいたみ病にふし、万死一生の由聞ゆ、彼大納言以レ使訪はるゝ返事に云く、畏り承畢、此病非二別事一、先日春は卅日やはあると仰給ひしを心うく思ひて歎の間、不食になりて已に今日明るにまかりなんと申されしと也、其後終に卒去、大納言大に歎思しめして、道に執する人の事荒涼に難すへからすと也、以上清輔袋艸子ノ抜書雑談抄ニ出ス、又哥とられて没後に其人の夢に見えし事は、源頼実朝臣といふ人、住吉に参籠して秀歌よませ給へと明神に祈誓し侍りて、我秀」歌をたに一首よみたらんには命をもまいらすへくと祈請して侍られける、其後に年へて病ひ甚しくて今〳〵と成侍られしとき、明神を恨奉り侍られしは、我去比参籠して秀歌祈し印もなくて今うせなん事の念なさよとてねふられけるに、明神詫し給ひて、汝秀歌なきよしを我にうらむる事いわれなし、すてに木の葉散るといへる哥こそ秀歌なれとの給ふと思ひて、其うらみをときて死したりしと也、此人の此哥の事也、

木の葉ちる宿は聞わくかたそなき時雨するよも時雨せぬよも　源頼実

此歌、俊頼卿、金葉集撰集の時、作者の名をかへて入られ」けるを、彼哥をかすめて出したる人の夢に頼実の来りて、歌をかへせ〳〵と責るよし見へけれは、金葉より此哥を切りぬきて出されたりと也、其後俊成卿、千載集撰集の時、作者頼実として此哥を出されたり、相かまへて。兼日も当座も。歌をはよく〳〵詠吟しこしらへて出すべき也。疎忽の事は。かならす後に難侍るべし。つね〳〵有心躰の歌を心にかけてあそはし候へく候

相かまへてとは、必前々より無楚忽やうに心かけて詠せよと也、兼日とは、会日よりまへに兼題は出さるゝ物なれは、日数の猶予あれは、とくと案しめくらして認出すへしと也」当座は其席に臨みての事なれは、疎忽の事も有へし、乍去、兼日執学の稽古の人は左様の疎忽も有ましき事也、是は平生かねて道に執し思ふへき事の教へ也、さてうたをはかく詠出するとも、それを能々みづから詠吟し返して、ふとみほそみもなきやうに、初心めかしううつくしう心あるやうの様に、兼題も当座もよく吟味して出すへしと也、ヶ様の事心得は、つね〳〵有心ていの歌を心にかけてよむべしと也、

但すべて。此躰のよまれぬ時侍る也。朦気ざして。心底みだりがはしき折は。いかによまんと案ずれども有レ心躰の」哥出来せず。それをよまん〳〵としのき侍れば。彌性骨もよはりて。無心躰侍る也。さらん時は。先景気の歌とて。姿詞のそゞめきたるが。何となく心はなけれども

哥さまのよろしく聞ゆるやうをよむべきにて候

但すへてとは、かくいへとも、惣しての心也、おしなへてよまんとするによまれぬときのあるものそと也、それは何ゆへといへは、趣向なとにしあぐみ、又は物に欝滞せしやうのときは、朦気ざすとて、朦らうとくらがりに入るやうに思はるゝ心の起るときあり、さやうの時は、心みたれて何を案しても埒の明ぬもの也、さやうの折は」二二ウいかに有心躰の哥をよまんとおもへとも、中〳〵よまれぬ物也、それをしゐてよまんとすれは、却て無心躰・無心所着ていのうた出来るもの也、爰か稽古の大事の端也、仍而此時の読様あんしかたをは教へ給ふ也、さあらんときは、先けいきの歌とて、四季の景望を第一として、ふかく心を入れさる所の景気うるはしく心さらりとしたる哥を、四五首よむへしと也、是此朦気を散して本心を求るの一助也、さはあれども、その景気歌たによまれさる事あるもの也、此時は三四五日も哥をはなれて、軍書にても又は我すきたる双子にても詩文学にても見聞して、一向哥の気をはなれたれは、今さら〳〵と哥の本心と」二三オり出る事有、此事、武者小路准大臣実陰公の仰られし事有と也、とかくけいこに様〻のやう有る事也、一へんにかたよるへからす、其中をとり、其よろしきをとるへし、

かゝるだにも四五日よみぬれば。朦気も散し。性気もうるはしくなりて。本躰よまるゝ事にて候。恋。述懐なとの題を得ては。ひとへにたゝ有レ心躰をのみよむべしと覚え候。此てひならでは。宜からぬ事にて候へき歟

かゝるたにもとは、かくあるたにもの略語也、ヶ様にして四五日ほとよみぬれは、例の朦気も打散し、性気あざやかにうるはしくなりぬると也、さありて本躰のうたのよまるゝそと」二三ウ也、又恋・述懐なとの哥は、ひとへに只有心躰のうたによむへしと也、是はいつれの題といへとも有心躰を心にかくへき事ながら、別して此恋・述懐やうの題は、人を恋しのひ身の愁れを詠するやうの題なれは、尤本心にしてよますは詮なく人意なき事なるへし、されはいくたひも有心躰をもとゝしてよむへしとなり、さらて景気よみにし、たゝことにいひなしては、題意の詮なき事そと也、

さても此有レ心躰は。余の九躰に渡りて侍るべし。そのうへは。幽玄にも心有るべし。長高にも又心侍るべし。残りの躰にも又かくのごとく。げに〳〵何の躰も実の心のなき歌」二四オはわろきにて候

さてもとは、さありてもと也、しかも此有心躰はの心也、十躰の中、余の九躰とも此有心の備はらざるは悪しと也、有心躰をもとゝして詠しならひたるうへは、幽玄躰をよむにも有心を存して幽によむへし、又長高躰を詠すとも、底意に有心を忘るへからす、其余の躰を詠するにも又〻如此に思ひてよむへしと也、けに〳〵いつれの躰も実の心なきはとは、けに〳〵とは、けにまことにいつれの躰も此やうを忘れすして有心の添へよと也、実の心は真実心の事也、真実心はうたにあらはれては有心躰也、是哥の本意」二四ウそと押返し〳〵教へ給へる態の意也、

今此十躰の中に。有心躰とてつらね出して侍るは。余の躰の哥の心ある

にては候はず。一向有レ心躰をのみ先として。よめるばかりを撰出して侍る也。何の躰にもたゞ有レ心様を存べきにて候

今此十躰の中に別して有心躰とてつらね出したる心は、余の躰の心あるといふには候はす、尤いつれの躰にも有心あれは、其中に有心躰をこのむに及はすといふ事にはあらす、一向有心躰かことに大事なるゆへ、かく書付て御覧に入るゝと也、一向とは、ひたすらと訓して余意なく有心躰」[二五オ]をむねとしてよむへき事と、此有心の事を十躰の中に殊更にゑらひ出して也、此度かく書出したる中にも殊に有心躰か肝要そと也、それを土台にしていつれの躰にも只有心様を存へきにて候、又哥の大事は詞の用捨にて侍るべし。詞につきて。強弱大小候べし。それを能〻見したゝめて。つよき詞をば一かうに是をつづけ。よはき詞をば又一向に是をつらね。如レ斯案じ返し〳〵。ふとみほそみもなく。なびらかに聞にくからぬやうによみなすが。きはめたる重き事にて侍る也申さばすべて。詞にあしきもなく。よろしきもあるべからすつゞけがらにて。」[二五ウ]歌詞の勝劣は侍るべし。幽玄の詞に。拉鬼の詞なとをつらねたらんは。いとみぐるしかるへきにこそ

前段までは哥の躰と其躰に本心を用ゆべき事をさとし教へ、此段より以下は又其本心を極め躰備はりたるうへには、又詞のつゝけからの差別に用意ある事を明し給へり、必畢前段は躰、此段は形也、躰形具足せされは、高位といへとも人躰備はらさるかごとく、其官を得、其位を得ては、冠より以下衣紋装束の形容とみつからの着なし様にて、出立はへのするとせさるとあり、又衣紋つきにて甚うるわしくもなり、甚見をとりするも有、其ことく其人〻」[二六オ]の気に応し又は其時の装束の取合にて、花やかにも見ぐるしくもみゆれは、それかことく此哥も、前段にて心と躰とを押極めたるうへには、又詞の用捨とつゝけからか大事そとの教へ也、されは詞に大小強弱こも〳〵打交へて詠したらんか、衣紋つきのことそぎたるがごとく姿おとるべしと也、されはそこに心を付て、つゝけがらよろしくめでたく見ゆるやうによみならへと也、ヶ様に案し返し〳〵して、ふとみほそみもなくなびらかに聞にくからぬやうによみなせとは、先きに強弱大小候へし、それを見したゝめて、つよきは一向つよくつゝけ、よわきは一向よはくつゞけよと有事也、是詞に大小を交る」[二六ウ]の心也、ふとみとは大の事、ほそみと云は小の心也、此ふとみもほそみもなく又聞にくからぬやうに、よく案し返〳〵てよむへし、是至て大事の事そと教へ給へる也、それを極めたる重事そと仰られたり、此詞当道の極(即朱)の重事そとの心也、申さはすへて詞にあしきもよろしきも有るへからす、つゞけがらにてうた詞の勝劣のあるべき事ぞと也、惣して詠し出る所の詞に善悪はなけれとも、哥はたゝつゞけがらにて詞のよくもあしくも聞なさるゝ也、されは其段を勘弁してよむべしと也、幽玄の詞に拉鬼の詞なとつらねたらんは見くるしかるへしとは、幽玄躰の詞、拉鬼躰の詞とて別にあるべから」[二七オ]ねども、やはらかにあはれげによみ出したらん哥に、中ほとよりこは〳〵しくふとき詞なとを詠し入て、此詞の強弱をましへて、それを一首の曲となさむとかまへてよむようの事を制禁し給へるやうの心得に、かく教へ給へり、此様のていを好む事は初心の漸みつから心得

たりとおもふ人の、人にかはりてめつらしくしなさんとて、まゝある事也、それを制禁しての詞也、

されば心を本として。詞をば取捨せよとこそ亡父卿も申置侍しか。或人の花実の事を。歌にたて申て侍るにとりて。古人の哥はみな実を存して。花を忘れ。近代の歌は花をのみ心にかけて。実にはめもかけぬからと。申ため」り。むざと覚え侍るうへ。古今の序にも此心侍るやらん。さるにつきて。猶此うへの了簡に。愚推をわづかにめくらし見侍れば。可レ得レ心事侍るにや

されは心をもとゝしてとは、されはさあれはの義也、さあれは和歌といへるものは、心を本として詞のうへは取捨せよと也、取捨せよとは、よろしくとるべき詞はとり用ひ、又此詞いかゝとおもふはすてよと也、亡父卿とは俊成卿をさしての給へる詞也、父俊成の卿のかくのことく教へ置給ひしとの事也、給ひしかのか文字、すみてよむべし。哉の心也。或人の花実の事を哥に立て、此事は或人とさゝせ給ひしは、「二八オ或」人〻の心也、前代にある人〻と也、此以下花実の論を立ていへる事は、六条家顕季の一流、清輔の作の奥儀抄などの或曰、又は四条家、是は大納言公任卿の支流、俊頼・俊恵などの一流也、是等の家の説に、此花実の沙汰を立られたる事を、爰にあけて、又古へ此趣の事、古今集に貫之も沙汰ありし事也、さあるにつけて猶此先哲達の沙汰し置たる上に、定家卿のみつからの了簡を更にくわへておもひみるに、いかにも心得へき事とものある事ぞとの教へ也、先此余流の先達たちの沙汰に、古への哥は実を存して花を忘れとは、上古は人すなほに淳厚なれは、いひ出る事至実にして心ふかくのへぬれは、詞にかひつくろふ品もなく、「二八ウ」只ありのまゝに情をのへたる風、万葉集の哥に粗見えたり、近代の歌は花をのみ心にかけて実を思はす、実にはめもかけぬからと申置れたるめると也、近代とは、俊成・定家の存在し給ふ当代、広くいはゝ三代集以下の集の時代以来の心也、三代集以来は世くだり人も拙く、真実薄くなりもて行て、文花をのみかさりて質を忘れたるがことくぞと、上古の性厚折情と末代薄情になりもて行、今古の性質の厚薄より、哥も如斯に実をわすれ花を尊ふやうの風儀に移りもて行と也、此先達の評をむさと覚へたるうへとは、むざとは、俗に、ムサと抔いふに心同し、ムサと」「二九オ」は、聊爾の心歟、むさといはぬ事なと俗にいへる詞は、聊爾にいはぬ事ぞといふ心也、されは、むさとの詞は大事をいふ詞なるへし、定家卿の御心にも此沙汰は大事と覚侍るから、思ひめぐらして見るに、此先達の沙汰は元来古今の序に貫之の沙汰有し事ぞと也、其古今の序に、今の世中色につき人の心花に成にけるより、あたなる歌はかなきことの葉出くれは、色このみの家に、下略、此貫之の序文を土台にして、四条家・六条家の人〻のとかくの沙汰侍るへけれと、一応の義はさる事なるへし、然共、此家〻の人の沙汰せらるゝ所の花実のあんばいと、此古今の序に」「二九ウ」いへる趣とは隔談の事なるへしと也、此事の侍れは、猶此古人のさたのうへを定家卿の御了簡を加へられて、一段の沙汰し侍らんと也、愚推とは、暗推といへるかごとし、定家卿みつから卑下謙退の辞也、

張紙　瑞成聞書云

むさと覚え侍るうへ、古今序にも此心侍るやらん

むさとは四条家・六条家にかけて見る詞也、古今真名序に云、夫和歌者詫ニ其根於心地一、発ニ其花於詞林一者也、と云に、かく古今の序にいへるをあしく心得て、四条家・六条家に心案もなく、むさと覚えたるものと見えたれと也、古今の序の心は、詞は本より銘々の器量に随ひて詠」し出すゆへ、もとより花実なるもの也、心は真実心をよみおほせたるを本意とせる故実也、花実相かねてよむを和歌の道の本意とすと也、されは詞は人々の器量次第につゝけなすものなれは、詞にかゝはらす心を専らによめとて、近代の人に寛平の以来のやうによめとて教へたる也、是前にいへる毫釐の逡ひ千里のあやまり也、只和歌は詞もうるわしくしかもやすらかにすなほに姿高く心も正風にして有心の趣を備へてよむが哥道の本意の事そとの心也、

所謂実と申すは心。花と申すは詞也、必いにしへの哥の詞は」つよく聞ゆるを。実と申とは定めがたかるべし。故人の詠作にも。心のなからん哥をば。無実哥とぞ申すべき。今の人のよめらんにも。心のうるはしく正しからんをば。有実の哥とぞ申し侍らん

今の人の哥とは、上の古人といへるに対したる詞也、此段は前段の花実の沙汰につきて、今古とも又花実有るへき事を沙汰し給へり、先きに或人の申されし花実の中に、実といふは心也、花といふは詞也、必古き歌の詞はつよく聞ゆるを、それを実とは定かたしと也、それはいかにそといへは、古人の詠する所のうたといふとも、心のなきうたをは無実歌といふへき也、心なくは、古人の所詠といふとも無レ念無レ詮して、哥とはいふべ」からす、又末代今の時の人の詠する哥なりとも、心正しく詞うるはしくしたてたらん哥は、有実の哥とて、まことに心ある歌ならは、いかて古人の詠作にをとるへき、さあれはかならすいにしへの人の所詠のみを有実の哥とは定めかたしとの批判也、かく見るから、必といふ字軽く見ては無所詮、必の字尤重く見るへし、実花の二字、実は本と真実心をさし、花は詞、花は葉也、詞のいひなり、さらは心を先にせよと教ふれば。詞を次にせよと申に似たり。詞をこそ詮とすべけれといはゝ。又心はなくともといふに似たり。所詮心と詞とを兼たらんを。よき哥とは申べし。心詞の」二つはたゞ鳥の左右のつばさのごとくなるへきにこそとそ思ひ給ひ侍る。但。心詞の二つをともに兼たらんはいふに及はず。心のかけたらんよりも。詞のつたなきにてこそ侍らめ

此段は前段に有実無実の哥の二儀を沙汰し出給ふより、其差別を爰にて沙汰し給へる也、されはとは、さあれはの心也、さらはとは、さあらはの詰手爾葉也、前にいへる有実無実の事につひて是非をいはゝ、先心を先にせよと教へるは、詞を次にせよといふやうにあたりて聞ゆる、又詞こそ大事なれ、詞のつゝけがらにこそ哥は大事のあれと教へなは、然らは歌は詞か大事にて、心のなくともくるしからんといふに等しかるへし」此二つの事はいつれをとりいつれをすつるといふ事なく、心と詞とを相兼てよみすゆべき事ぞと也、此心詞はたとへていはゝ、車の双輪のことく鳥の両よくのことし、かた〳〵かけては成就せざる事ぞと也、心詞兼備したる歌はいふに及はす、兎角の是非なし、是歌の最上なれは論なしと也、今爰にいふは、心のかけたらんよりも

詞のつたなきにて侍らめと也、心のかけたらんとは、心のかけたるらんよりのつめにして、心の不足したらんよりも、詞の俗態俗言にしてふつゝかに耳立たるやうの事は、猶みおとりのせらるゝぞと也、されは心の不足なる歌も本意にはなけれども、二つの中には詞のつたなく俗てい」ならんよりは、心の不足なるかたがまだしもましなるらんと也、此二品の義はいつれとも哥の本意にてはなし、只心と詞と相兼たらんやうによむべしと也、

ケ様にしるし申し侍れとも。又誠に宜き哥の姿とは。何を定め申すべきやらん。まことに歌の中道は。只みつからしるへきにて侍るなり

右花実よりして有実無実の沙汰万端引出てかくは申つれとも、又然らは是ぞ最上の歌とは何を定め申べき、みづから愚案にはしかと是ぞとは得思ひ極めずとの謙退の意也、されは此哥の道と申はまことにえかたき事ぞと也、其哥の道」とは和歌の中道そと也、凡儒道には是を中庸と云、仏道には実相中道と説り、哥道又如斯して、哥道の中道を極むへき事也とぞ、此中道は人にならひ知る事にあらす、みつから稽古して推極むる事なるへし、禅家、拈華微笑の意を伝ふるも、直指人真見性成仏、意心伝心、不立文字の教に等しかるへき事也、此段歌道の極即高上の論なるへし、

張紙　瑞成聞書

まことにうたの中道は

此所大事の御教へ也、中道とは、仏の道にも中道実相と説り、儒者の道にも道心惟微惟精惟一、允執厥中と中庸に記し、和歌の道には本より正風真実心と教へさせ給ふ、皆道は」一つなるもの也、然れは中を得る事は、哥の道に於ても能〻功夫をこらして執行の上にて、只人力を用ひす、天然自然と独自らしるへき事にて侍ると也、只自らといへる、大切の詞也、謹んで能〻見侍るへき事にこそと也、

さらに人の是こそと申によるべからす。家〻にたつる秀逸の躰まち〳〵也。俊恵はたゝ歌をは雅幼かれと申して。やかてわが歌にも。その姿の哥を秀逸と思ひけるとかや

人の秀逸といふに、それにかたよるへからすと也、家〻一流〳〵よりよみ出れは、此躰か秀逸の躰よと定めたる事はなしと也、是より下、その家〻に立る秀逸のやうを述給へり、先俊恵法師の立られたる趣」は如斯そと、此所俊恵の一流をしるし給へり、此俊恵は大納言経卿の息俊頼朝臣の子也、然れは三代の秀人也、一家のていを定たる人也、此俊恵のおしへには、哥のよみかたは只おさなき子のやうにおとなしく、是はよき子かなといふやうに、ものをたくますにすなほによむを、それを秀逸と覚えて、みつから此てひを秀逸と定められたり、

俊恵歌に、かすみにけりな昨日迄波間に見えし淡路島山

俊頼はえもいはず。長高きを宜きと申しためり。其外品〻に申しかへてそ侍る。更に。短慮難及ぞ覚え侍る。なにもしれば。あながちに大事になり侍るならひなれども。殊に此道はさとおぼえ侍り。」

俊恵の父俊頼朝臣は、俊恵の了簡とは遠ひて、いかにも長高きすかたを執し思はれたりと也、

沖津風吹にけらしな住吉の松のしつえをあらふ白波

経信卿哥也、是正風体にして長高き歌也、又、

山さくら咲にし日より久かたの雲井に見ゆる瀧の白いと

あすもこん野路の玉川萩こえて色なる波に月宿りけり

うつら鳴まのゝ入江の浜風に尾花波よる秋の夕くれ

以上三首俊頼朝臣の歌也、是は長高体に幽玄をくわへてよまれし也、経信・俊頼・俊恵三代の内、就中俊頼秀たる也、右の外に四条家大納言公任卿の一流也、六条家六条修理大夫顕季の流、顕季・顕輔・清輔等、六条家重代也、此人〻の家〻に各其家其人の執し思ふ体、又人の面の(フモテ)」(三五オ)ごとくに一へんならず、秀哥のてひ好み〳〵に様〻あり、更に短慮に及ひかたきとあるは、定家卿みつからの謙退の詞也、短才の者の中〳〵是等の趣は得知りかたき事と也、何もしれはあなかちにとは、何れの道とても、入立ぬれは大事になると也、是哥道にかきらす、諸道にわたる詞也、一切の道、外よりは得安く見ゆれども、其道に入て其道を極めんと思ふにたやすからす、各其道の要道大事のあるものぞと也、就中此哥道は入学の心かけやうにて、正路にも入、邪路にも入るとの心也、されは中〳〵疎にする事にてはなし、いかにも大事なる事ぞと也、殊に此道はさと覚え侍るとは、諸道の上にかけていふ詞也、其道〻に大事もあるへけれとも、取わきて此哥道といへは、彌左様に大事の事に」(三五ウ)定家卿は思候との心也、夫をいかにといふに、歌道は治国平天下の道をも極る事なれは、聖教同前の道にて、修学する心得様か大事ぞと也、

我心の中(チ)にて。歌のむかし今を思ひ合て見申すに。古へよりも当時はことの外によむ哥ごとに。わろくのみぞ覚え候へ。是はとおもひていだすは。まれにぞ侍る。

我心のうちにて、是定家卿の御心中に、古風と今風と見合申すに、古へ古人の哥は和歌の根本ゆへ哥也、哥よみ達也、是上古清浄潔白の心よりよみうかへたれは、清浄の本哥也、今世は哥を作る也、今人根気下劣(レツ)なるゆへ、いかにも古人のことく根気を入れてよまれねは、とりつくろふて巧みてよむ故、哥かわろしと也、左様の中の哥な」(三六オ)れは、是こそと人の中へ書て出すほどの歌もなしと也、

抑。歌は。いよ〳〵高き事に侍りけりと。先哲の庭訓も。今こそおもひ知られて侍れ。先哥に。秀逸の様と申へき姿は。万機をもぬけて。物に滞ほらぬ哥の。十躰の中(チ)の。いつれの躰とも見えず。しかもまた其姿を皆さしはさめるやうに覚えて。余情うかびて。心なほく。衣冠正しき人を見る心地するにて侍るべし

抑とは発語也、前段を改て更に趣をのへんとするに用る字也、是より以下一段は定家卿みつから秀逸のやうを教へ給ふ也、前段に俊恵・俊頼なとの秀逸の立かたにとりて、又二条家の秀逸のていと定らるゝやうをしるし給へる也、先哲の庭訓、此詞、先哲先賢」(三六ウ)の事也、されとも庭訓とあれは、亡父俊成の卿の示教をの心なるへし、庭の訓へとは親の子に教ゆる謂とあれは、俊成の卿の教なるへし、千載集俊成卿撰集也の序に、抑此歌の道をまなふ事をいふに、から国日の本のひつ(ママ)きのふみの道をもまなひず、鹿の薗、わしのみねのふかき御法をさとるにしもあらす、只かなのよそじ(四十字)あまり七もしのうちを出すして、心におもふ事を詞にまかせていひつらぬるならひなるかゆへにこそ、三十も

しあまり一もしをたによみつらぬるものは、出雲八くもの底をしのぎ、敷島やまと尊のさかひにいりすきにだりとのみおもへるなるへし、しかはあれども、まことには、きれはいよ〳〵か」三七オたく、あふげはいよ〳〵高きものは此大和哥の道になんありける下略、此詞、四書の詞をとりて書給へり、此千載の序は、後拾遺已来、金葉・詞花のたくひ各四条・六条の家風義そこなわれしを、二条家の流にあらためらるゝ趣ゆへ、此序其心ある也、此俊成卿の教訓を、定家卿年〻練磨の功成て、今こそ先哲の庭訓尤の事よと覚智したるとの心也、此哥に付て秀逸のさまと申べきすがたは、俊恵・俊頼の定められしも、各一流〳〵其趣可然有るへけれとも、二条家定家の卿の思召入られたる秀逸のすかたを立ていはゝとの心也、万機をもぬけてとは、万ッのはたばりと訓して、もの〳〵にと」三七ウいふ心也、森羅万象人の心迄も取集めて也、それを何にても哥にとりて自由自在によみて滞なきやうがよきそとの心也、

張紙　瑞成聞書

万機をもぬけて

万機とは、山川河海草木禽獣魚鼈及人間なとの、天地の間に生育する所の森羅万象をさしていふ也、機といふは、自然と各其容を備へて奇なる所を機といふと也、それをも打ぬけて物に滞らす、すらりとしてしかも長高き哥にして、前に書頭はせる所の十躰の中のいつれの躰とも定らず、しかも又十躰の内のいつれの躰にも渡りて、長高とみれは長高く、幽玄と見れは幽玄と見へ、何の躰とも定られす、皆さ」三八オしはさめるやうの姿なるを無上の秀歌といふへしと也、十躰の中のいつれの躰とも見へず、十躰の様子は先きに書て遣せられしに、其中に本ノの歌の躰といふは秀逸をもとゝする、其秀逸は此十躰いつれそとも定めすしてとの心也、本秀逸といへる哥は、十躰の中チいつれにうつしてみても其躰の様あるが秀逸そと也、定家の秀逸と定られし哥は、此境を得たる哥を秀逸と執し思召たるぞと也、此境の哥はたくみてよまんとかまへては中〳〵出来す、只自然天然とよみ出る所に出来る哥也、是大やうにてはよみ得る事かたし、多年稽古のうへ、いかにも其道を執し、当流の正儀能〻心得」三八ウたる能師に給仕随順して、其事と迄おもひ得たらん上にて此秀逸の事は沙汰し、又三神の冥慮に叶ひたらん人のうへにての天然自然といふ事也、大やうにけいこもうとく道の覚悟もなき人のはやりかに心得貌したるは、分際にては所詮及かたき所也、道に心かけん人の此所を疎そかに過捨へからす、余情うかひて心直く衣冠正しき人を見る心地するにて侍るへし、此趣は、其秀歌の体をさしての給ふ詞也、先余情とは、三十一字のうへに猶景気も心もうかびたるを余情といふ也、心直くとは、哥の心直くと也、心正しくすなほにとの心也、衣冠正しき人とは、朝参する袍也、」三九オ此袍と冠するとをさして衣冠といふ、是公卿の表の装束也、此衣冠を正しく着こなすに、大臣納言なと其ほと〳〵にきわの立様、沓の引やうなと見ゆる也、親王・摂家・清花・羽林、名家其様〻の自然の形粧の自然とわかるゝ事天然也、是先途に進む公卿の、それ〳〵と別れてみゆるやうに、秀歌てひの、凡骨とはなれて一の人などの衣紋正しく着こなすか笏を正しうして南階をねり上らるゝ、其形粧のことくなる

やうを、定家卿は秀逸のてひと定め給ふとの心也、

つねに人の秀逸と心得て侍るは無紋なる歌の。さは〳〵とよみて。心をくれ。たけの有るをのみ申ならひて侍る。三九ウ」それは不覚の事に候へく候かゝらん哥を。秀逸とだに申すべくは。哥ごとにもよみぬべくそ侍る

しらぬ人のつねに秀逸といふ歌は、見所はなけれども、心ふかくも見へずなから、何とやらんたけのあるやうに見ゆるを秀逸と心得たる也、それはたとへていはゝ、衣服にふせんりやうか又は貝ふなとの織ものならて、巧みなる紋の衣服を用るやうなるを、つねの人の秀逸といふそと也、ふせんりやう・かひふなとは、きとしたる三公なとの常服の織もの也、此巧みなる紋の衣服を用るやうなるを、是を無紋の哥といふ、さすかにたけはあれども、さは〳〵として心もなきと也、四〇オ」

左様の哥を秀逸といはゝ、定家卿なとは哥ことに百首にても千首にてもみな〳〵秀逸はよませらるへきぞと也、

沈吟事極り。案情すみわたれる中より。今とかくもてあつかふ風情にてはなくて。俄にかたはらより。やす〳〵とよみ出したる中にも。いかにも〳〵秀逸は侍るへし

是かまことの秀逸をえんの心用ひ也、一ふしよみ出んと思へは、沈吟とてふかく案し入、趣向極りたるうへ、案する情もすみて、案し得て、是か秀逸とおもふて書んとするとき、わきよりふとふら〳〵と出る哥に秀逸か、聖人を見るがごとくの哥か、思はすと出るぞと也、今とか」四〇ウくもてあつかふとは、兎角如斯案しすまして書んとするかたはらより安くと不意によみ出らるゝうたか至りたる秀逸也、是天然自然の事也、是稽古至らされは出こぬ事也、

其歌は。まづ心ふかくたくみに。詞の外まてあまれるやうにて。すがたけだかく。詞なべてつゝけがたきが。しかも安らかに聞ゆるやうにて。遠白く幽玄なる景趣立そひて。俤たゝならず気色ばみて。さるから。心も詞もそゝろかぬ哥にて侍るなり

是その不意に出たる秀逸のうたのすかたのやうをいふなり、心ふかく詞の外に心飽まてあまれるやうにて、すがたた」四一オけ高く、詞つゝき自然にひやうしよく、何とやらん一ふしあるやうに思ひとられ聞ゆるやうなから、しかも安くむつかしけなる心なふして、しかも遠白体・幽玄体などかねて相みゆるやうの景気そひて、哥の様やういならす、よき女のゑもんつきのよきか、ものかけよりさしのそかるゝやうに見ゆるやうのうたなるへし、さやうにぶんぶつ打そろふて不足なく兼備したる歌は、心も正風に正しく、詞もそゝろかず、おとなしやかにゆふに覚ゆるやうにあるぞと也、是はわさとよまんとする事なかれ、中〳〵わさとはよまれぬ事也、此段は凡慮をはなれて住吉・玉津嶋の神」四一ウ御魂の徳の顕はるゝ事なり、されは此堺は人智是非の境をはなれたる事也、此堺に至るには、かねて稽古怠らすして無怠慢、よく〳〵練磨して後に、神慮にあつかりたらん時よまるゝ事そと也、

又いにしへの歌にも。今の歌にも。よにいひおほせられぬやうに聞ゆる事の侍る也さ覚ゆる事は。いかにも初心の程なるへし。上手のわざと。爰までと詞をいひさす哥侍り。明らかならすおぼめかしくよむ事。是已達の手柄なるへし

是は古人といへとも今人とても、いひおほせぬやうの哥か有」四二オこと也、此うたは初心末学の分際にては中〳〵きこへぬといふてすつれとも、已達上手の人のきこへぬやうによみたる歌は、下手なる人は得きかす、已達の人の見てはよく其理聞へて、実已達の人のしわざよとみる也、此卿の当代の天子後鳥羽の院、定家卿の哥を御覧せらるゝ度に、そのまゝはきこへがたくて、一二三度も指置〳〵御沈吟有てのち次第に聞出して、其甚深微妙のやうがみゆるから賛嘆し給ひけるやうの事也、是至りたる上手の哥人のしはざ也、後鳥羽院さしも此道の御秀人におはしけれは、此定家卿の歌は感吟し給ふ也、」四二ウ不堪の人はさやうの歌は一へん見て聞かぬるゆへ、よみ損したる哥そと心を入れす甘(肯カ)なはさる也、是不堪の人の常也、さるは其境堺に至らされはなり、上手のわざと爰まてと詞をいひさす哥侍りとは、態と聞えかぬるやうによめる事いひさし、手爾葉といふものにてかたはしをよみて、余情をてにはにもたせて読残したる事也、是已達の人のしわざ也、中〳〵不堪の及ばさる所也、

さむしろやまつよの秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫　定家卿

是等のたくひなり、おほめかしくよむ事とは、覚束なきやうによみて余情を手爾葉に」四二オもたせて、心ふかくよく義理相叶ふやうのうた也、それをうらやましと思ひて。学びもえぬものから。未練の人のよめるは。いかにもかたはらいたき事にて侍る。大かた哥にうけられぬ物は。秀句にて候。秀句も自然に何となくよみ出せるは。さても有ぬべし。いかゞせんととかくたしなみよめる本句が。極めて見くるしく。見ざめする事にて侍るへし

已達の人か左様によむとて、未練の人のそれをうらやみて、此躰の哥をよまんとすれば、中〳〵大きに誤(アヤマル)る事也、それはかたはらいたくわらはれくさになる也、さて大やう哥よむにうけられぬものは秀句のとり用ひ」四三ウぞと也、秀句とは、

立わかれいなはの山のみねに生るまつとしきかは今帰りこむ　行平朝臣

立わかれていなはと秀句につゝけ、又みねに生るまつとつゝくる事かいつれも秀句といふ也、又、霞隔二遠樹一と云題にて、

から錦秋のかたみに立かへて春はかすみの衣手の杜　雅経

此てひの詞、秀句にいひかけたれども、秀句にくさりつつけて益にたゝぬ歌也、是を秀句のいたつら歌といふ、此哥かくいふは、から錦秋(にしき)のかたみとは、紅葉をかくしたるなるへし、立かへて春はかすみの衣手の杜といへるは、立かへるといふは、露にかけて衣手の杜といはん為の」四四オ秀句也、此哥唯衣手の杜計を取出したる計にして、一首題意の所詮なきゆへ、やくにたゝぬよし、古賢先達の沙汰有る事也、哥主は雅経卿なれは、尤功達名誉の人といへとも、一ふしとおもひ入られたるによみそこなへる事は、先達といへとも如斯の誤り有る事也、末学未練の人は別して此趣心にかけて稽古すへき事也、されは秀句といふものは、あしくつゝけなせはかゝる疵(キズ)の出来るゆへ、大かた歌にうけられぬものは秀句そとおしへられたり、此雅経の卿の哥のごとくは秀句はかり作り出して、何のせんなき歌にて、細工人」四四ウのさいく歌也、是

等は用捨すへし、見さめのする事にて侍ると也、又秀句をうけて尤秀逸の出来るもあり、

こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ　定家卿

是もこぬ人をまつとつゝけ、やくやもしほのこかるゝなと秀句つゝきなれとも、至つたる秀逸の歌には難もおはす侍る也、ヶ様につゝけなせはよけれとも、功達の雅経卿たにも誤り給へは、秀句はうけられぬものと思ふへし、

又本歌とるやうは先にもしるし申候ひし。花のうたをやかて花によみ。月を頓て月によまん事は。達者のわざなるべし。春の歌をは秋冬なとによみかへ。恋の歌をは。雑や季の哥なとにて。四五オ」しかも其歌をとれるよと聞ゆるやうによみなすへきにて候。

本歌を取やうは先達而もしるし出し進したるごとくと也、花の歌をやかて花によみ、月の歌を月に詠る、如斯に自在に取なしてよむ事は功達達人の上の事也、未練の人は花を花に詠し月を月に詠ん事は斟酌あるへしと也、初心の程は本歌とりてよまんとならは、春夏の歌を秋冬に用ひかへ、こひのうたを雑や季の歌にとりなしてよむへしと也、花を花、月と月、初の人の取てよめは、姿も心も詞も本歌に等しき事出来る也、それを等類とてきらひ、且は古人の金玉をぬすむといふものになり、あまつさへ無疵本歌の金玉を」四五ウけかすやうの事出くる也、されは初心の人に此趣あるゆへ制し給ふ也、堪能はそのまゝ取てよみても、心も詞も格別の事に取なさるゝゆへ、手からにもなり名誉も出来、返りて本歌をも引立るやうの事もあり、是は格別の境界也、能因法師の歌に、

心あらん人に見せはや津の国の難波わたりの春の気色を

といふを本歌にして、

かすみゆく難波の春の明ほのに心あれなと身をおもふかな　為家卿

是等本歌を論らはす其ものを取りてしかも秀逸也、堪忍の業也、又此為家卿の歌にて能因か本歌世に口にある事になりて、ともに名を得たれは、是等は本歌をも引立るやうの事に成りて」四六オほまれある事也、本歌の詞を。あまりに多くとる事は有ましき事にて候。其中に詮と覚ゆる詞を。二つばかり取て。今の歌の。上下の句にわかちをくべきにや。たとへは。夕ぐれは。雲のはたてにものぞ思ふあまつ空なる。人をこふとて。と侍るうたをとらば。雲のはたてに物そ思ふ。といふ詞をとりて。」四六ウ上の句下の句に置て。恋の歌ならざらん。雑や季なとによむべし

此趣詠哥大概にもしるし給へり、詠哥大概をとくと拝見して此趣を心得べし、又詮と覚ゆる詞二つはかりとれとは、三十一字のうちに詮と覚ゆる詞をとの心也、詠歌大概には、二句のうへ三四字、三句とはとらすと有、爰には二句はかり一もし二もし計とあり、其斟酌は稽古の人の心にあるへしと也、是本歌の取用ひやう大やうをあげて、如斯のやうに取用ひよとの教へ也、

此頃もこのうたをとりて。夕くれの詞をも。とりそへてよめ」四七オるたくひも侍り。夕ぐれのなどやらん取りそへたるもあしくもきこえず。珍しく詮と覚ゆる詞を。さのみとるわろくなれる也

此事は此夕くれの本歌をとりて、

詠め佗それともなしにものそおもふ雲のはたての夕暮の空

新古今恋の歌也、作者右衛門督通光、後には久我大政大臣殿と申し人なり、俊成卿の門人にて、同門の人ゆへ助けて其人とさゝす難せられし也、此通光卿の本歌の取用ひやう、うけられぬ事と思召てかくしるし出給ふ也、

又余情に。幽にとりて。其歌にてよめるよとも見」四七ウえざらんは。何の詮か侍るべきなれば。よろしく是等は心得てとるべきにこそ

余情に幽にとりてとは、本歌取りたるとも見えすして其歌をとりてよむやうの事也、是を盗人哥といふ、是かあしき也、たとひうらやみよむとも、それを余情にかすかにおもはせてとりたるかあしきそとの事也、ヶ様の事はよく吟味してとれと也、

又題をわかち候事。一字題をばいくたびも下の句に顕はすべきにて候。二字三字より後は。題の字を。甲乙の句にわかち置べし。結題を。一所に置事は無下」四八オの事にて侍るとかや。又かしらにいたゞきて出るうた。無念と申べし。古くも秀逸どもの中に。さやうのためし侍るとも。それを本にひくべきにあらずかまへてあるましき事にて候

此段題をとりて哥よまんに、そのよむへき用意を示し給へり、先題をわかつといふ事は、一字の題には題をわかつ事はあるへからす、是は二字三字乃至四五字の字の多き題か、又は結題なとの事也、一字題は一字なるゆへ、わかつへき事なし、但此一字題にとりては、幾度よむとも題意を上の句にいひ終らず」四八ウして、題の心題の字を下の句にいひあらはし、哥の心をも上の句にはよせの詞を思ひよりてあつかひあしらひよみて、下の句に心深くよむへしと也、か様によめは、歌の姿もよく心もすはりてめてたくみゆる也、初心の人は大やう題意をやかて上の句にてよむゆへ、下の句かあしらひものになりて、題題かちのうたになりて見くるしくみゆる也、是を腰折哥とも尾かれうたともいふ也、されはうたは一字題にても結題にても心得てよむへしと也、二字三字より後はとは、二三字及四五字あらん題の事也、是は題」四九オの文字多けれは、其題意を上の句下の句に程よくわかちてよむやうに心かけよと也、甲乙の句とは、上の句下の句といふ心也、此詞のつゝけから、ふとみほそみなきやうによく吟味してをくへしと也、ふとみほそみとは、ふとみとはつよくたくましき詞をいふ、ほそみとはえんにやわらかにゆうなる詞也、此ふとみほそみなきやうとは、上につよき詞にてつゝけ出たらは、下の句もつよき詞にてあしらひ、上ほそき詞を用ひたらんには、下の句にうけてよめんにもやはりよはき詞にてつゝけよとのこゝろ也」四九ウそれを上の句につよくいひて下の句をよはき詞にてあしらふやうなるは、竹に木をつきたらんやうにて見くるしかるへしとの教へ也、此所に心をつけてよむへき事そと也、又結題を一所にをくといふ事は、たとへは月前花、荷露成珠なといふやうに、月と花をむすひ、はちすに露を結合せたるやうの題の事也、大かた三四五字の題はすへてむすひ題多し、ヶ様の題をよむ時の用意也、たとへは荷露成珠といふ題をえて、やがて、はちすにむすふ露ぞ玉なる、なとゝよむやうの事か無下」五〇オに聞ゆるぞと也、此てひの題ならは、

はちすはのにこりにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく　僧正遍照

なとゝ上下に句をわけて、上下に縁の詞をかけて、上下の句の心格別にならす等しきやうにとりなしてよめと也、又かしらにいたゝきて出る歌とは、是は題の詞を初五もしからよむやうの事也、たとへは梅なといふ題に、やかて初五もしに、梅の花なとゝよみ出る様の心也、是等は功達の人はせさる也、かならす初心の人のわきまへなき心からヶ様の事をするを制禁したる詞也、又ふるくも秀逸の中にさやうのため[五〇ウ]し有」とも、それを手本にすへきにあらずと也、此心は、古人の秀逸といはん歌にヶ様に初五もしに梅をやかて、

梅の花それともみえす久かたの天きる雪のなへてふれゝは　人丸

とよみたらんやうの事もあれは、何のくるしき事あらんそとおもひて、わきまへなき人の是等の歌をは手本とし本拠としてよまんは憚ある事、よからん事そと也、それをいかにといふに、ヶ様の哥は至つたる秀逸なれは、格別の事也、秀逸なれはゆるすかたある也、其分別なき初心末学の人の師伝もなきか、わか了簡にて、古人の詠格あれはくるしからずと一途[五一オ]」了簡にてよむ事、甚斟酌ある事也、

但又よく。出きたる歌にとりて。すべて五文字ならで。題の字の置れざらんは。制のかきりにあらす。とぞうけ給はりをきて侍りし

まへに初五もしに題の字よむへき事不可然とあるにつきて、さやうにはいへとも、又二句め已下よく心詞とゝのひたらん哥の、是非初五もしならては置所のなからんやうのうたにおきては、またしゐて此事を制禁すへき事ならすとの心也、たとへは時鳥・女郎花なとの詞、又藤はかまなとゝいふ一字題にても、[五一ウ]」此詞二句以下の詞首尾して、さていつくに置んにも置所なきやうのときは、初五もしに時鳥とも藤はかまともをくへしと也、是を制禁せぬぞと也、

病の事は。平頭の病ひはくるしからす。声韻のやまひはかならず去りまほしう候。平頭病もなからんにはをとり候へく候。四病八病なんどは。人のみなしれる事に候へば。あたらしく勘へ申に及ばず候。天性病に。をかされぬ程のうたに成りぬれは。何のやまひもいたつら事にて候べし。さてよろしからぬ哥の。しかもやまひさへ候はんは。又[五二オ]」いたつら事にて候はめ

此段は哥の病ひの沙汰をし給へる也、其やまひ多き中に、平頭病はゆるすと也、平頭病とは、上の句の始のかなの文字と下の句のはじめのかなの文字と同字なるを平頭病といふ也、たとへは、

あさぢふの小野ゝしのはらしのふれとあまりてなどか人のこひしき

又、

哀いかに草葉の露のこほるらん秋風たちぬ宮城のゝ原　西行

如斯上の句下の句のかしらのかなもし同字なるを平頭病といふなり、是はゆるすと也、此平頭病も、おなしくならは随分と吟味してよめぬがよきぞとの事也、[五二ウ]」声韻病といふは、同心病といふに同し事也、是は上の句に八重かすみなといひて、下の句に九重なとゝ読む事也、八重の重と九重の重と同字也、仍而声韻病といふ也、是はよむましき事ぞと他、但し此事につきて二品有り、

古しへのならの都の八重桜けふ九重に匂ひぬる哉　伊勢大輔

是は上下に同字あれとも、声韻とも同心ともいふへからす、八重さくらけふ九重と句つゝきによみたれは、上下と句はわかれとも、句つゝきたれはやまひにはならぬ也、又近代、後水尾院の御製に、」五三オ

さくら咲桜の山の桜花ちるさくらあれは咲さくらあり

是初五文字より句ことにのこらす桜といふ文字あり、されとも此哥声韻病のとかめなし、是は病ひにならさる也、いかにといふに、句ことにかく同字を置くは、わざと心得てしるしたるものゆへ、やまひにはならざる也、病ひになりて制禁するといふは、上の句下の句にはなれて同字のある事也、それを声韻病とて嫌也、伊勢大輔か八重さくらけふ九重のたくひは、句つゝきなれはやまひにはならす、此哥をたとへは、

八重さくらならの都に咲つるをけふ九重の花とこそ見れ」五三ウ

なとゝ、八重と九重の重文字ヶ様に句を隔てよむやうの事を声韻病とてきらふ事也、又病ひに四病八病なとゝいふ事あり、是は石川女郎式・喜撰式・浜成式なとゝて、古来先達の哥のやまひを沙汰しをかれたり、委は袋艸子清輔作なとにあり、より〳〵考へしるへき事也、是は古人の印をかるゝ式目にて、なへて世上に哥よむ人のかねて見ならひ知りたる事なれは、今あらたに此趣をしるすには及はすと也、又天性やまひにをかされぬほとの秀逸の哥に於ては、いかなる四病八病のそひたらんにても更に其」五四オやまひ咎る事なし、さあらぬわるき哥のそれさへあるに、又やまひの添たらんはいふへくもなく無下成る事なれは、初心の人随分病ひのなきやうに考へてよむへしと也、彼天性やまひにをかされぬ哥とは、

ほの〳〵と有明の月の月かけにもみち吹をろす山おろしの風

塩かまの浦吹風にきり晴れて八十嶋かけて

此歌、きりはれて八十嶋かけて同韻也、されと秀逸ゆへくるしからす、又、

けふよりや木のめもはるのさくらはな親のいさめの」五四ウはる雨の空

是上に木のめもはるのといひて下に春雨の空と、はるといふ詞上下にわかれてやまひとなる事也、然とも此歌は、上は木の目のはるとつゝけて草木のめを出す事也、下は春雨也、是等は等類の字といへとも、心大きにかはりたれは、やまひにはならぬ也、ヶ様の事初心にはわきまへかたし、よつて師説をうけて此等の趣よく〳〵尋ねとひて稽古すへき事肝要也、上件の秀逸のうたにとりては病ひも病ひにならすと也、是格別の事也、さて初心のこゝろさへあやしく心得かたき哥の、しかも病ひのそひたらんは無下に見る所なきゆへ、此等の初心のうたにはよく〳〵吟味して病のなきやうによむへしと也、

かへる山何そはありてあるかひはきてもと」五五オまらぬ名にこそありけは（はり紙）

れ　躬恒

新古今冬

詠むれはわか山の端に雪白し都の人よあはれとは見よ　慈鎮

なかむるも見るも同韻也、同意也、是等はみな同字声韻なれとも、秀逸の歌なれはくるしからす」五五ウ

三首の哥。五首の哥。乃至十首までも。同詞をよむ事は心あるべきにて候。珍しからぬ詞は。あまた所によめるもくるしからず。耳にたつ詞の

珍らしきは。ながの詞にて候はねとも。二字三字もあまたよみつれば。あさましき事にて候。地躰其詞をこのむよと。人に聞なさるゝまじき事と。あさからず亡父卿制し候ひしにげに又わろく覚え候

前後は病を制し教へ給ひ、此段は毎首に同し詞をよみならへる事を論し給へり、是は三首又は五首或は十首なとの組題を独吟によまんときの心得也、あなかち此段制禁せらるゝ事にてはなけれとも、心得て斟酌すへき用意をしめし給ふ事也、毎首に同し事をよむといふは、最初の哥に露とも風ともいふ詞をよまんに、次の哥にも其次にも其類の詞を哥毎によむ事也、しかれとも雨・露・風・雲・けふり・なみたなとの詞、又は久かた・足引・玉ほこなといはん詞を如斯に制するにはあらす、就中風・雲・露の類ひの詞は毎首よみたらんに憚なし、今是を制し給ふは、めつらしく耳にたつ詞を申事也、めつらしく耳にたつ詞とは、雲・雨・露のことくなる平生耳なれたる詞にてはなく、あらうみのいかなる魚、大舟のゆたのたゆたなといふやうの類、一首といへとも人の耳にきと立」様の詞は毎首にわたりてよむ事いかゝと也、又とはかりに、ものからになといへる事毎首よむやうの類ひ、是等は耳にたつ詞にもあらす、珍らしき詞にてもなけれとも、毎首にわたりてよめは、とはかりにずきのものからずきとの、地躰其人の癖のやうに人の思ひなすやうの事、兼而心得てさやうの事もくせといはれんやうに心かけてよむへしと也、此段は前段と遠ひて、必如斯によむなときと制せらるゝにてはなし、是は哥よむ人の嗜み心得へき事そとの用意に教へ給ふ詞也、師説、耳にたつ詞とは、人のめそはたてゝみる詞を多く毎首によむは悪し、又あしくけやけき詞をとり用ゆるは猶わろしと也、長詞とは、二三字ならす五字七字二句迄もかけてよみつゝけたる詞のことなるへし」上件の事は亡父俊成卿もつねに心得へきよし仰られしと也、定家卿も此俊成卿のおしへ御尤と同意し給ふとの心也、雲。風。夕くれ。などやうの詞は。いくつよめらんともくるしう候まじ。と覚へ候それもなからん哥の。すてがたからんは。いくらもおなし言葉をよみすへて。さても候ひなん。無下のゑせうたの。みだりがはしく。同し詞をさへよみまぜたらんは。いとよからじにて候

此段前段の末也、風・雲・夕くれ等の類ひの詞はいくつ有とてもくるしからすと也、是は天地の内に平生さし定たるものなれは、此等の詞いく度にても制すへきにあらす、ゆるしてよむぞと也、それもなからん哥のすてかたき哥にくるしからすといふ心也、是は地哥なとの事也、地哥なとまてにはゆる」すと也、無下のゑせうたみたりかはしくとは、無下は、とるにたらす引上ていふへき事のなきといふやうの心なり、ゑせうたとは、腹を抱へて笑ふやうの哥をさしていへり、是等の無下の哥に同し事の多きは猶こうたてしく思はるゝぞと也、

当時。曙の春。夕くれの秋。などやうの詞つゞきを。上なる好士ども〻よみ候事。いたくうけられぬ事にて候。やう〳〵しげに。あけぼの〻春夕ぐれの秋なとつゞけて候へども。唯心は。秋の夕くれ。春の明ほのを出ずこそ候めれ

当時とは、定家卿当代をさしていへる詞也、今の人何にても珍らしき事を」いはんとては、春の明ほのを明ほの〻春とよみ、秋の夕くれを

夕くれの秋と字を転倒して用ひたれとも、心はやはり春の明ほの秋の夕くれといふ事にて、別にかはりたる事にもあらさる也との事也、定家卿の在世、上の好士どもとさし給ふは秀能・有家・通光なと、家隆・雅経におとらぬ人々も此詞をとり用ひてよまれたるぞとの心也、いたくうけられぬとは、ヶ様の詞、初心の人は何もしらぬはさやうにもよみもすらん事なるに、上様の其頃にも人の口ふる哥人のヶ様の事をとりはやしてよむ事はいかゝと也、いたくうけられぬといふは、いたくとはしゐての心、あなかちの心也、うけられぬとは、合点せぬといふ心、承引せぬ意也、尤なる」五八ウ事と同心せられぬ事そと也、うけひかぬやうの心也、やう〳〵しげにとは、様有りがほといふ心、ことの有かほといふ心也、右件の曙の春夕くれの秋なとゝいふ詞、文字を上下に引直したるといふ計にて所詮もなき事そと也、すかたも心も珍らしからぬ曲もなき無益なる事そと也、

げに心だにも詞を置かへたるにつれて。あたらしくもめでたくも成り侍らんは。尤神妙なるべく候を。すべて何の詮ありともみえず。殊におこがましき事にて候。是ぞ哥の癈るべき躰にて候める。かつはいま〳〵しき事と。かへす〳〵も申置しに候

けに心をだにも詞を置かへたるにつれて、あたらしくもめてたくもなり」五九オ侍らんとは、さやうに詞を上下に用ひかへなどしてよまんには、まことに其哥の心も新らしくなりめてたくうつくしくもとりなすやうの事に成てこそ其所詮は有る事なれとの心也、此用ひかたは、先達功者のわさには詞を上下に用かへて手柄も名誉もある事、和漢詩哥の上証拠あり、詩には　碧梧癈レ栖鳳凰枝　杜子美か句也、哥には、

うらみわびまたし今はの身なれとも思ひ馴にし夕くれの空　寂蓮

杜子美か詩は、鳳凰すみあらす碧梧の枝といふ心也、それを其儘に用ひては語勢よはく句曲なきゆへ、転倒して用ひかへたる也、又寂蓮のうたは、うらみわひ今はまたしの身なれともといふ心を、句を転倒して用ひたる也、」五九ウ是も今はまたしといひては利は明らかなれとも、句曲なく又すかたもこのもしからさるへきを、またし今はと句を上下へ用ひ替たるにて、風情も珍らしく語勢もつよくいかにもめてたく聞ゆる也、是等は道の堪能のしはさ、一人の粉骨也、か様にとりなさんには其詮有て名誉ものこれば、いかにもよむべき事也、さもあらぬ初心未練の人のけいこもせぬ、自分の智恵発明を頼みて、此ていの事をうらやみこのみてよみぬれは、只益もなき例の明ほのゝ義夕くれの秋なといはんは、さしたる一ふしもなく所詮もなきいたつら事そと也、師説、神妙といふ詞は、神なとの妙に思召てめて給ふようの心也、かやうの神妙の詞をすてゝ置て異躰の事をこのむはあしき事也、さやうにひたもの是等の詞」六〇オを世にとりてもてはやす時あれは、それか哥のすたれる端そとの心也、何にても上古より流義の正しきを失して新意にこしらへるは道のすたるはし也、そのかみ連歌に筑波集といふ抄おこりて後、中古それにつく心をもて犬筑波といへる抄出来たり、此犬つくはに対して誹諧師山崎宗鑑といふ人、猫筑波といふ書をあらはしたり、はい言をもて作りたる書也、是連歌の犬つくはに対して書る也、誹諧といへとも昔は古風をあふきて、連哥の犬つくはによりて書り、

今様の誹諧師は只あたらしく〳〵とのみ心かけて、古風先哲の掟を守らす、頗傍若無人の事也、恐るへし、源氏源氏(ママ)は〻木〻の巻に、木の道工みもとかけり、是大工工匠の道も古法をたかへすしてつくるを基とすると也、」(六〇ウ)是何の道も古代の事か宜しきといふ本拠にあげて、木の道の巧みの事をも、は〻木〻の巻に書出たる也、

右師説といふより以下は、本文のかつはいま〳〵しきといへる詞の註也、いま〳〵しきといふ詞は、今めかしくて忌みは〻かるへきとの心也、是そうたの廃るへき、此詞尤大事也、か様に何となりとも珍らしく〳〵とのみ心にかけて、いみ憚る事なくてよみ出ぬる時かうたのすたるへきはしぞと也、此趣、詠歌大概に、未来記雨中吟とて、是等のいまめかしく忌〳〵しき心詞をは〻からすわか心に打任せてよみたる趣を定家卿みつからよみ給ひて、末代後学の人の為に、かくよめは邪路に入、哥道既にすたらんほとに、此ていを(六一オ)」学ひよむへからすとて印給へる書あり、此庭訓抄の此段の心と一致せる也、申し置しに候、此詞、俊成卿のつね〳〵定家卿に此事仰置れしと也、定家卿御一人の思召にもあらす、俊成卿の教へそと也、此教へ尤の事と思召から、未来紀雨(ママ)中吟なとは編集し給へるなるへし、

張紙

是そ哥の廃るへき躰にて候める、かつはいま〳〵しき事とかへす〳〵も申置しに候、瑞成聞書云、ヶ様に夕くれの秋なと〻よみ出て人にわらはれそしらる〻やうになりては、哥の道に退屈の心出来て、すたるへき事と也、彼はいかいにも、山崎宗鑑の猫築波(ママ)といふものあり、是は今の世にすて〻用ひ(六一ウ)」ず、其中にあまたいへり、たとへは、声の匂ひといへは郭公になるといふやうの類ひ也、古来の道はすたりて皆新流になるは、是哥の廃るへき躰と也、いま〳〵しきとは、いまめしき事の忌は〻かるへき事也、源氏は〻木〻の巻に、

木の道のたくみの。万のものを心に任せて作り出すも。臨時のもてあそひもの〻。そのものと跡も定まらぬは。そはつきざればみたるも。実かうもしつべかりけりと。時につけつ〻さまをかへて。今めかしきにめうつりて。おかしきもあり。大事として。まことにうるはしき人の。でうどのかざりとする。さだまれるあるものを。なんなくし出る事なん。なをまことのもの〻上手は。さまことに見えわかれ侍り。と云〻

是等の如し、番匠の道にても、上手はいにしへの材(六二オ)」をたがへず作り出せるゆへ、其道にたがはず作り出すを以て上手とはいふへかめれ、あたらしき事の定れるやうなきものをし出して、しかもゆがみすじりなとして人に笑はるれは、道のすたるへき事にして、かつはいま〳〵しき事と也、それゆへ俊成卿も返す〳〵此事を仰置れしと也、

先にしるし申候し十躰を。人の気の趣を見て授くべきにて候器量も器量ならぬもうけたる其躰侍るへし。或は幽玄躰をうけたらん人に拉鬼躰をよめと教へ。又長高躰を得たる輩に濃躰をおしへは何かよく候べき前達て十躰の事沙汰有し也、其十躰に付、各得たる躰得ぬ躰あれは、其人の(六二ウ)」器量をみて、其人の得たらんていをおしへよとの趣也、器量も器量ならぬもとは、器量ある人も又器量なき人も、うけたる其躰か有るものそとの心也、うけたるていとは、人〻に得たる所の躰かある

もの也、是性得の口つきある事也、其性得の口つきについて、幽玄ていを得たる人もあり、長高ていを得たる人もあるへし、それにその性得の得たるよみかたをすてゝ、幽玄躰はあしく拉鬼ていを学へよとおしへ、又長高ていを得たる人に濃なる躰をすゝめなとするやうの事を禁しめらるゝよし也、さやうに事と引たかへておしへ道引なは、あらぬかたへよこ入して、哥の風情わろくなりもて行、何のよろしき事は有ましきそと也、此段は師となる人のみつから長高体をゑ」六三オたらん人か幽玄躰を得たる弟子の哥を見て、我このむ風にたかふとてそれを制禁して、わか得たる長高ていによめとひたぜめにせめてよますやうの事は、其人のいまた哥道を得さるゆへの事そと也、師となりて人を教へんには、よく了簡を加へて性得のよみかたをそだてゝ教へよと也、此段師なる人に教戒し給ふ心也、

但仏の説給へるあまたの御法も。衆の気にあたへ給へるとかや。それにすこしもたがふべからず。我。好むやううけたる姿なれはとて。此躰を得さらん人にをしへ候はんこと。かへす〳〵道の魔にて候べく候。其人のよめらん哥をよく〳〵見したゝめて後に。風躰を授くへきに候。何の躰をよまん」六三ウにもなく。正しき事は渡りて心にかくべきにこそ

是又其機まち〳〵にして一へんならぬ事を、釈迦如来の華厳・阿含・法華・涅槃・念仏等の法に比して根機相応の法をおしへ給ふことく、和哥又是にひとしきやうをしめし給へり、わか好むやううけたる姿なれはとて以下の詞、是師範とならん人の心得をしめし給ふ詞也、其師みつから拉鬼躰を得たりとて、其門人に各其我すける拉鬼のていをよめと教へたりとも、弟子は又濃躰・抜群ていなと性とく得たらんもあるへし、各機まち〳〵なれは、得る人有、得ぬ人あれは、教ゆるに一へんには教へかたし、只けいこする人の性得えたるていを考へて、其てい〳〵を誤らぬやうに示教して道に」六四オ入らしめよとの心也、その分別もなく強而みつからのえたるていにならへといはんは、返〳〵道の魔障なりと也、その人のよめらん、此詞の下は、そのけいこの人の日頃の詠格をとくと見知りて、何のていにてもあれ其性得の風をおしへよと也、先内〻詠格を窺ひみて、さて其後に其風体をよめとおしへよと也、何のていをよまんにもなく、是より以下の詞は、けいこする人のうへにかけてみる事也、十躰のうち何の躰をよまんともそれは我得たる躰にて、何にてもそれを本としてよみすへよと也、正しきことは渡りて心にかけよとは、此十躰の中、何の躰にてもあれ融通してよみなは正道の」六四ウ心ははづるゝ事有へからす、何の体にも正道の心を思ひてよみならへよとの趣也、

さればとて又其一躰に入ふして。余躰をすてよとには候はず。得たる所を地盤として。正位によみすへて。さて余の躰をよまんはくるしう候まじ。たゞ正路をわすれてあらぬかたに趣を。つゝしむべき事とぞ覚え侍る

此段以下闕席、依之半井瑞成聞書を以註之、猶満光今案の所は別に満私云と記之てみつからの愚案をしるす、

瑞成聞書

されはとては、さやうにあれはとての心也、たとへはわか長高躰を得」六五オたれはとて、其長高躰を而已一生よめといふにはあらず、それは

わか得たる所の躰なれは、先其躰を地盤にしてよく〳〵正風有心の正路によみすへて置て、能かたまりて後に又余の躰をもよむへしと也、一向に余の躰をすて置てわか得たる所よむへしといふにはあらすと也、それをさはせすして、我得たらん処も我得さる所もいまたかたまらさる中によめは、哥の躰あしくなるのみにあらす、一向に道の本意をうしなふほとに、さやうにかきませてすましき事と也、さてとは、さありての心也、かく有てはといふ心也、さありて余の躰をよまんは無別義と也、たゞといふは、何のていにわたりても、全く正路を忘れて我心の趣にまかせて、あらぬか」[六五ウ]たにとこ入するなとの心也、正路とは、わか稽古する道のひとへに師の教への通りにまもりてよむ事也、あらぬかたとは、其正路のみちをすてゝさあらぬ邪路に横入する事也、是自故の僻見にかたむくやうの事也、師はかやうに教へられたれとも又かくよみてもくるしかるましなと思ひて、我僻見を立るよりして邪路に入事也、それをおそれて心を慎て正路をしるへからずと也、

今の世にもかたをならべて。互に達者の思ひをなしたる輩も。多分このをもむきを弁へかねて。たゞわがよむやうを学べとのみをしふる事。無下に道をしらぬにて侍るべし」[六六オ]

満私云、かたをならへてとは、定家卿と牛角の達者そと世上に風聞する人〻なるへし、此詞牛角の心なるへし、

瑞成聞書云

かたをならへてとは、当代に定家卿とかたをならへて互に上手といはるゝ輩也、六条家修理大夫顕季、四条家には俊頼・俊恵、二条家には家隆・雅経の類ひの人〻あれとも、今定家卿の仰らるゝ所の道の道理は弁へ知かねて、たゞわがよむやうの躰をまなべとのみ教へらるゝ事は、一向道をしらぬといふものにてあるへしと也、只わかよむやうとは、其流義を俊成卿にえて、定家卿は俊成卿の教へ給ふ道を学ひ得て、其道を守りてよめとも、よの人は只我よむやうにとおしへらるゝと也、誰ともさし給はすに仰らるゝ也、

満私云、六条家は顕季元祖にして顕輔・」[六六ウ]清輔なと其時代〳〵の達人也、家家卿当代の六条家の人は大蔵卿有家なるへし、四条家は大納言公任卿元祖にして、其子定頼・大納言経信・俊頼・俊恵也、鳴長明は俊恵の弟子也、家家卿当代の四条家の人は源三位より政・鳴長明是等なるへし、二条家俊成卿門人には、後京極殿早世・家隆・雅経の人〻なるへし、家隆卿は子息相続なし、雅経は子〻相承して、今に二条家の弟子といへとも、飛鳥井の一家又一流にて、少は了簡も有事にや、此家〻の人〻定家卿当代の好士達の各わか弟子に教へらるゝやうは、只わか得たるうたに、器量有も無器量も此やうによめ〳〵と教へらるゝよし也、其他の人〻の教へらるゝやう不可然との義也、まへに委示教し」[六七オ]給ふことく、人〻得たる所得ぬ所有は、其人の得たる所を地盤にしてよくよみすへて後又十躰に渡りてよみならへと也、道を人に教ふるには、か様にして教へされは道に入かたきもの也、此弁なくわがすくやうにのみよめ〳〵と教ふるは、一向哥道の極即をしらぬ人の事にして、無下にいふにたらぬ事そと也、

若われよりこえて物をも高く案じ。すぐれたる姿を骨とよまん人のあら

んに。かやうに提撕(テイセイ)しては何かよろしく侍るべき

瑞成聞書云、是は師匠よりすくれたる人の事也、提撕(テイセイ)とは、昼夜教て功夫さする事也、道の功夫のしやうを教へて功夫さすに、若師匠の得たるていよりは一段すくれて高きすかたを骨随によまん程の人に、我得たる」(六七ウ)所の躰をよめとおしへは何かよろしかるへき、哥のあしくこそなれ上るといふ事は有るましきぞと也、

満私云、前段に師たる人の門人に教ゆるやうの心得を示し給へる首尾也、前段にいへる人〻の教らるゝやうに、師の躰のことくによめ〳〵と教へん門人の中に、もし又師にまさりて風躰よく物を高く神妙に案し、人丸赤人の気象にもおさ〳〵おとらぬやうの姿さまを心に入れてよまん弟子のあるを、それを引もときてとかく此方のよむやうによまれぬそなとゝ折檻し教へなは、それは無益の事にして何のよき事かあらんそと也、ヶ様に提撕してとは、此所にてはヶ様といふ詞、其様」(六八オ)にといふ心に同しかるへし、提撕とは、折檻し教ふるやうの心なるへし、されは此趣は定家卿当代の人〻の人に教ふるやうの趣をしるし給ふ也、今定家卿の教へ給ふは、此人〻の教へやうとは格段そと也、其定家卿の教へは、前段にもしるされたることく、其人〳〵の器量をみて、其人〳〵の生得にえたる所の風躰を見込(コミ)て、其てい〳〵によみ入らして、功成道成就すへき気熟の時に、十躰におし渡りてよめと自由自在のなる所にて余躰をも教へらるゝと也、如斯に教へす、我得たるかたに無理にすゝめてよめと教ふるは、無下に道しらぬ人の教へそと也、是二条家の教へ也、此趣尤俊成卿の御教への趣也、さらに定家卿の私にあらすと也、実」(六八ウ)さもあるへきには、俊成卿は幽玄躰をえ給ひてみつから執してよみ給へるに、定家卿は又拉鬼躰をえ給ひて骨つよによみ給ひしに、定家卿の思召すには、父の卿の教へをうけなから、わかうたの躰の父卿の哥の躰に逮ふ事のいかゝよと思召て、俊成卿へ此事は相談有しに、俊成卿の曰、いやとよ、そこは拉鬼躰を得たる也、そこのていか哥の本意なるゆへ、我もさよまんとうらやましく思へとも、われは其ていをえされは力なし、そこには憚からす其ていをよむへしと仰られしと也、是此格言あれは、定家卿みつからの私にてなき事しられたり、其俊成卿の教か実道理なる事よ、人に道を教ふるは如斯有へき事と」(六九オ)定家も御同心にて教へ給ふ也、定家卿の御門人にも此衣笠殿・常盤井殿・鎌倉右府・御子息為家卿、各世一の門人といへとも、躰を得給ふ所は各格別也、鎌倉右府は人丸の骨随を天然とえられたれは、此人は此趣にてよみつのりて、世上に其人とあふき、為家卿は又正風幽玄の趣を得給ひて其姿によみ給へり、是又俊成卿定家卿に教へ給ふ趣に随ひて、定家卿其趣に道引き給ふゆへに、かく門人の人〻に名高き人の出る也、此段は師とならん人の上に可心得やうを示教し給へる也、

俊頼朝臣。清輔朝臣なんとの庭訓抄にも。此はしをまゝ申た」(六九ウ)めり。構(カマ)へて邪にをもむく所を。いかにも守り教ふべきにて候

瑞成書云、我はかりにあらす、俊頼も清輔も庭訓に書給へりと也、かまへてとは、たゝ一向に引かまへて也、師の弟子に教ふるも親の子に教ふるも、正風に趣き入るやうに引かまへ居ておしへよと也、

満私云、かく定家卿のおしへ給ふ事は二条家一流のみにはかきらす他家にも心ある人々のおしへは如斯そと、自他の家の達人の人教ふるやうの一致なるやうを教へ給ふ也、他家といへとも、俊頼・清輔なとの教へやうみつから道を得たる人の趣は各一致するものそとの引合にの給ふ事也、此はしとは、此教への端也、いとくち也、それをまゝとは、此庭訓抄をみるに、其抄物の所々に」七〇オ此趣を書たるよし也、構へて邪路に趣く所をそ守(ママ)りおしふへきにて候とは、先哲いつれも如斯におしへられたれは、此所か此道の大事なれは、大やうに思はす、此邪路に入へきさかゐをよく〳〵心をつけ、無油断引かまへて、邪路に趣かざるやうにいかにも〳〵大事にかけて守り教ふへき事そと也、

如法器量なる人も。教へをうけすして雅意(ガイ)に任せてよみいたれば。口(クチ)の自然に趣く事の候

瑞成聞書云、如法とは、此時代の文法に多く有る詞也、もとより或は従来なとゝいふやうな事に用ひたる詞也、生れ付といふ事也、元来生れつきの器用にして器量ある人も、正道の教へを受すして正路を習ふたる事なけれは、我器量ある」七〇ウから我意に任せてよみ居るゆへ、口の自然に邪路に趣事の候と也、

満私云、此段われより越てものを高く案しといへるにかけてみるへきにや、左様に器量有人の有りといふとも、よき師を不求して我まゝによみなさは、天性の器量ありとても邪路に入てあしかるへし、何の道もさありとはいへとも、別して哥道は、てにはの難義、切紙口決の伝授等多き道にて、我げにさこそと推量して、哥はかるもの也、強而師を求め尋とふに及はす、世〳〵の勅撰もの語なと窺ひ見て自得すれはいと安くさらりと埒の明くと心得て、我思ふやうに義理をつけて、古哥さうしをみてやかて其趣を自得したりと思ひては、大に逮ふ事也、是家の大事を知らさるゆへ也、されは哥道は別して正路正しき師を」七一オゐらひて随身して随分と稽古すへき道成るよしの教也、器量有とても如此に心得よと也、

まして非量の人の。殊にわれと只おさへてよみならはんとし候へば。あしくなり行候へ共。あがる道は候はず

瑞成聞書云、まして無器量の人の、われと只おさへて我慢つよくならはんとし候へは、あしくはなり行ともあかる道はなきと也、器量ある人さへ真道をならはすしては邪路に趣くに、まして非量の人の我慢つよく我とおさへて其道を学はゝ、一向邪路になり居(スエ)へきと也、

満私云、上の段に器量ある人さへ能師を不求、我才覚を以てよめは邪路に趣くよしを教へ給ひしをうけて、器量ある人たに師なくしてよむはわろき事なるに、況や」七一ウ不器量の人のさやうにして自分の了解にてよまん事は彌不可然、以の外の事そと也、まして(イウンニヤ)といふ詞は、況といふ心也、それさへあるにいはんやといふ心也、われと只押へてよみならふとは、師もなく我才覚の分際に一応の事を存して、我不器の了簡にかたつけて、是にてよしと思ひてよむやうの心也、哥道はさやうに我まゝに心得ては中〳〵得る道にはあらす、よき師を求てよく教へを聞てさへ不器量の人は得さる道なるを、なま心に我と我了簡にてすましてはゆかぬ道そと也、

凡。哥を弁へて。善悪を定むる事が。まことに大切の事にて候

瑞成聞書云、弁へてとは、是大事の事也、とかくけいこのうへにてなければ哥は弁七二オ」へられぬもの也、それゆへけいこの上にて哥の道を師匠に能聞弁へてならへよと也、さやうにして後に、是は善是は悪、是は正是は邪としるへし、さなければ我人の師となりて人に善悪邪正を教ふる事ならすと也、

満私云、凡とはすへてといふ心、惣して哥をよく弁へ定る事かまことに大事なる事そとの心也、是前段に、器量あるも不器量なるも師をとらす我まゝによみ入る事はあしきよしを教へて、其やうを爰にて〆くゝりして、哥道を能弁へ邪正を正し定る事か当道の実に大事の事也、是正道伝授の上ならては此是悲決定しかたきの謂也、只。人ごとに推量ばかりにてぞ侍ると見え候」七二ウ

瑞成聞書云、推量はかりとは、人丸も人なれは我も人なり、人丸正風のていをよめらんにわれもなんそよまさるへきなとゝいふやうの推量事より、邪路に趣く方多し、さやうのかろ〳〵しき事にてはあらすと也、

満私云、只とはさしつけていふ詞也、哥は善悪邪正を弁へてよむ事なるをしらす、只一応のおしすい暗推のみにては行ぬ道なるを、さやうに思ひ入てよむ人もなく、推量沙汰に止まる人のみのやうにみゆると也、定家卿世上の哥よみのさまを勘かへ思召との事也、

其上は。上手と世にいはるゝ人の哥をば。いとしもなけれども誉あひ。七三オ いたく用ひられぬ類ひの詠作をば。抜群の哥なれども。結句難をさへ」とりつけてそしり侍るめり只。主によりて哥の善悪をわかつ。人のみぞさ候ふらふめる。誠にあさましき事と覚え侍る。是はひとへに。是非にまよへるゆへなるべし

瑞成聞書云、そのうへとは、是より非量の人のなすわさにつけて、其程みゆる事をの給へり、またそのうへにといふ心也、定家卿のことく世に上手といはるゝ人の哥の中にも、いとしもなけれとも其哥をほめあふと也、いとは最の字也、爰にては尤よろしくもなけれともといふ心也、是は上手の哥ゆへ人の何ともえいはす、定てよき哥ならんと思ひて是をほむると也、又世に上手とも聞えぬ人のよみたる哥の中にも能哥もあれとも、それをも秀逸とも思はす、何のあの人のよむ哥かよかるへきと」七三ウ 思ひあなとりてみるゆへ、秀逸の哥といへとも、ほむる事はさてをき、いろ〳〵にあらぬ難をつけていひほぐすと也、ヶ様に非量の人の哥道をえしらぬ人のさたは、我しらぬのみならす、人の事は云出たがりて、しらぬ上から、上手といふ人のうたとさも聞えぬ人の哥と哥の善悪はしらすして、わか暗推にてほうへんしそしりつほめつして、道を得て眼のひらきたる人に笑はるゝなと誠にあさましき事そと也、是ひとへに是非の弁へをしらぬからの事そと也、是暗推にて事を済し、其道に入てみぬゆへ、是非に迷ひ分別しかねて云出せるゆへ也、師云、此趣今猶ある事也、近代御所の御会始に鶯有慶音といふ題にて、

十かへりをかねても君か松のうへになく音花なる春の鶯

武者小路実陰卿」七四オ

野へに行きみそのに来なく鶯の心や春にをき所なき　中院通躬卿（雲井イ）

此哥一双の哥也、実陰卿は当時上手と人の賞翫の人也、通躬卿は重代の人なれとも平生は実陰卿におくれ給へるかた有けると也、然とも此両首ともに其時の秀逸也、それを只実陰卿のうたをのみほめのゝしりて、通躬卿の哥はさもなきやうにいへり、是等の沙汰此教へにあたれり、

満私云、近代の事師説のことし、又定家卿の百人一首を拝見するに、

あはち嶋かよふ千鳥のなく声にいくよね覚ぬ須磨の関守　源兼昌

此作者中古の人なれとも、先哲哥仙のやうにもいはす、世にしられさる人なり、されとも此哥は秀逸故、定家卿百人一首に入られたり、又定家卿当代に、通具・通光・有家（七四ウ）・秀能・具親・顕昭・頼政・長明、又女には俊成卿女・宜秋門院丹後・後鳥羽院宮内卿・小侍従なといふ上古の哥仙にも恥ぬ人々あれとも、其人々のうた此百人一首に入られす、中古名もしられさる人なれとも、此兼昌の哥を入られたり、是定家卿道をみる事天の如くにして、其人をみす其哥を見て撰集し給ふ事、尤高論の事也、此趣、此庭訓の此段の御詞に附合せるにや、恐らくは寛平以往の先達の哥にも善悪の思ひわかれん人そ歌の雌雄は存するにては侍るへき

瑞成聞書云、雌雄は上下也、哥の善悪の事也、おそらくとは、恐れ多けれとも寛平以往の人にても、哥の善悪の思ひわかれん人は哥の道をしるといふものにては」（七五オ）なく、今の人にても、稽古よく定り師説を聞分て道の善悪をよく弁へんこそ、哥の道を知りたるとはいふへしと也、

満私云、恐らくとは、恐れ多くはあれとものの心也、寛平以往とは、寛平年中以往の事也、五十九代宇多院御在位の頃まて、それより以上、万葉より以来此宇多帝の御代迄の哥人をさしていふ詞也、万葉より寛平の頃迄は、実世も上り人の心もすなほに朝政正しく国家ゆたかに、誠に治国平天下の世也、其世の人々のうたは、性質正直にしてよみ出たれは尤神妙也、さりなから其時代の人々の哥にも善悪邪正はある事也、その上古の先達といはるゝ上手の中にも又さもなき哥も侍れは、上古先達の哥とて悉信仰すへきにあらす、此善悪を正し極る人か哥の雌雄（シユウ）を存する」（七五ウ）人といふへしと也、雌雄（シユウ）とは、雌は女鳥（メ）、雄は男鳥（ヲ）也、されとも爰にては是非善悪のけちめを弁へしるやうの心に用ての給へり、雌と雄との見分（ケ）かたきやうそとの心なるへし、けぢめとは、揚目（ケチメ）と書て、同色のものゝいつれとも見分（ケ）にくきやうの心、たとへは松もみとり也、杉もみとり也、此松杉枝をかはしてあるか、同色にて其是非か分ちかたきやうの心也、けちめみするとは、色のわかるゝやうの心也、恐らくはとは、寛平以往の先達の哥の沙汰迄論し侍る事は恐れ多き事なれともと、定家卿の謙退の詞也、

かくしれるやうには申侍れども。愚老もつや〳〵弁へ得たる所侍らずこそ。さりながらさして卑下すべからざる事と覚え侍る」（七六オ）

瑞成聞書云、かく申せはの心也、定家卿卑下の詞也、今内府殿の、家の庭訓のやうを学ふと仰らるゝ、道を尊敬なさるゝ御心の難有けれは、つゝますかたはしより書つらねて候へは、愚老も道の本意を弁へ

たるやうなれとも、さにはあらすと也、しかれとも又重代の事にて候へは、さして卑下すへき事にても侍らすと也、

満私云、かくとは、如此知れるやうには申せともの心也、愚老とは、定家卿老後の事なれは、みつからをさして愚老と也、つや〳〵弁へ得たる所侍らすとは、つや〳〵といふは、それは其事、是はかくときつと弁へたる事はなきとの詞也、さりなからとは、さありなから也、さはありなから又さして卑下斗すへき事にてもなしと也、是過言に」(七六ウ)聞ゆれとも、定家卿全く私なし、先達の道を相承して、父俊成・定家と家さへ重代に及ひたれは、身不肖なりといへ共、道は先達のより相承伝授したる道なれは、我身は不肖なれ共、道におゐてはさのみ卑下すへき事とも思はさると也、

去ぬる(しイ点)元久の頃。住吉参籠のとき。汝月明らか也と。宜しき霊夢を感し侍りしによりて。家の風に備へんために明月記(メイゲツキ)を草(ツタテヨム)し置(サウ)て侍る事も。身には過分のわざとぞ思ひ給ふる

瑞成聞書云、元久の頃定家卿住吉社参のとき、明神に世の人民百性(ママ)も皆正風に趣くやうにと心願ありしに、明神霊夢に、汝月明也と告給ひしとの事也、此」(七七オ)御神詫の心は、汝とは定家卿をさしての給ふ詞也、月明らか也とは、定家卿の此願、本心真実に哥道を大切に思召心の至誠心から明神感応有て、此霊夢を蒙り給ふ、此清浄潔白の心有て願はるゝか、神感有て此願心のきよくすみ渡りて朗なるを月に比して、汝か心は清浄潔白にして、なへての人をして正風に趣かせんとの志、和哥の道の本躰なれは、此道の上にては天下の師として教ゆへきもの汝より外になしといふ心也、ヶ様のあらたなる霊夢を蒙り給ひて、此事を子孫にものこし置て、末代の鏡に見せん為の家の風に備へんと思ひて、明月記はしるし置たると也、草とは、草案とて下書の事也、唐土にも起草なとゝいふ也、さて明月記をしるし置候事」(七七ウ)身におゐて過分のわさと存すれともとは、是は人に見せんにてはなく、子孫に残さんために書たるとの心也、

満私云、元久とは八十三代土御門院の年号也、元久年中住吉参籠し給ひて、此霊夢を蒙り給ひしよし也、汝月明也といふ註、瑞成聞書に委し、略之、宜しき霊夢といふ詞、爰にては有かたき霊夢を得たるとの心なるへし、家の風とは家風の事也、北野の御神未た人臣にておわしましける時、才智世に越給ふゆへ、家の外の右大臣になり、延喜の帝の御師範に迄なり給ひし也、此御神の御母の御神、文章生より任官昇進のとき、

久かたの月のかつらもおるはかり家の風をも吹せてしがな　北野御神の御母」(七八オ)

備ふるとは、家風の掟にし給はんの心也、亀鑑に備ふるなといふ心也、吾子孫の手本に先祖よりかくのことくそと守り勤るやうの料にしるし置るゝとの心也、全く他家の為ならす、又他見して人に振廻ふてしるすにもあらすと也、明月記四十巻或は五十巻有り、正本は四十巻有るか宜しきと也、此明月記をしるしをく事は定家卿の分際には過分のわさと人は思ふらめとゝの心也、乍去是は我家の記録にして子孫の為にせんとての事也と也、

ケ様のそゞろ事さへ申侍る事いとかたはらいたくそ覚え侍る

瑞成聞書云、道の本意を御尋なさるゝか辱きによりて、かやうのそゝろなることを書付侍る事かたはらいたき事どもと也、かたはらいたきとは」面目もなき次第ぞとの心也、七八ウ

満私云、ケ様のそゞろ事とは、此やうなたはいなく正躰なきことを申上るも、道を御執心なさるゝに付て、其道の正道の事を申上るとて、とはすかたりのゐせ事をさへ申上るを、内府にはいとかたはらいたくそ思召らめの心也、いとは最也、尤也、片腹いたきは、人わらはれになるやうの心也、尤人わらはれになるへき面目もなき次第そとの心なるへし、

又。古詩の詞をとりてよまん事。凡。哥にいましめ侍るならひと。古も申たれども。いたくにくからずこそ

瑞成聞書云、むかしは詩の句をとりてよめは、哥の詞こは〳〵として七九オかた」くなるとていましめて、詩の句を哥には取用ひさりしに、定家卿の時代にはゆるし給へりと也、三躰詩の七言の句に、鳥下二緑蕪一秦苑夕　蝉鳴二紅葉一漢宮秋　又長恨哥の句に、春風桃李花開日　秋露梧桐葉落時　なといへる句は皆哥に和し合ふ詞なれは、哥に取用ひらるゝと也、

しげうこのまで時〻まぜたらんは。一ふしある事にや侍らん

瑞成聞書云、しげくこのめば又哥のこく〳〵とならん事をおそるゝゆへ、繁くこのまずして時〻まぜたらんは詩のたすけにもなり、又詩の句を自由にとれば且は哥のたよりともなるゆへ、とき〳〵よむへしと也、又人も一ふしある事に聞なすものなれは、かた〳〵すつへきにあらずと也、」七九ウ

常に白氏文集第一第二の帙の中に。大要の所侍り。かれを披見せよとぞ申置き侍りし

瑞成聞書云、是詠歌大概にも出たり、今世間流布の白氏文集といふは白氏長慶集といふもの也、昔渡りたる白氏文集は今世になし、定家卿の時代には此白氏文集第一第二の帙の中に、長恨哥・琵琶行なとの類ひ、うたの心に能通したるを集めたる書ありとみゆ、其文集の中の長恨哥・琵琶行なとの類ひの哥の躰によくかなひたるを常に見るへしと、俊成の卿も仰をかれしとの心也、」八〇オ

詩はけたかくすますものにて候

瑞成聞書云、詩は彼国大国の風ゆへ、気を澄して気象高くなるものゆへ、ひたふる詩を詠して後、心のよくすまん時うたを案すれは、正風有心のよろしき長高き躰のうた出来るものゆへ、能〳〵詩を詠吟せよと也、是人の常に嗜むへき事と也、

尤哥よまん時は。高人の御前ならば。心中にひそかに吟じ。さらぬ会席ならは。高吟もすべし。哥には先心をよくすますが一のならひにて侍り

瑞成聞書云、貴人の御前にて哥よまんときは、我心に得たらん哥にても」八〇ウ詩にても、ひそかに詠吟して能心を一境にすまし、又さあらぬ常の会席には高吟もすべし、よく其場所を考て、時に臨みてひそかにも高くも吟すへし、是等道を嗜む人の平生の心かけ也、

吾心に日頃おもしろしと思ひえたらん。詩にても。又哥にても。心に置

て。それを力にてよみ侍るべし

瑞成聞書云、或は詩の句ならは、月落烏啼霜満レ天の類ひ、哥ならは、西行の、秋風立ぬみやきの〻原、又家隆卿の、明けは又こゆへき山のみねなれや、の類ひの詩哥の句の面白きと日頃おもふ所を沈吟し、それをわかよむ哥の力にしてよみ出すへしと也、」八一オ

初心のほどはあながちに案ずまじきにて候

瑞成聞書云、初心のほどは、あなかちに案ぜず、さら〳〵と足のをりぬやうに、くせのつかぬやうによみならふべきそと、初心のほとのけいこのやうを教へ給へり、

満私云、あなかちとは強而と書、しいて案すましきと也、しいては、つよくの心也、いたくといふに同し心也、足を下さぬやうとは、おもくよむをあしをおろすといふ、只かるくよみならへと也、

さやうに哥はたゝ案ずべき事とのみ思ひて間断なく案じ候へは性もほれ却て退く心のいてき候まゝ口なれん為にはやらかによみ習ひ侍るへし」八一ウ

瑞成聞書云、哥は案せねはならん事そと心得て、間断なく初心の時に案すれは、気根も疲れ性気も耄〻となりて、はては哥に倦む心の出来て、退屈の心か出るもの也、さやうになれは哥も疎ましくなりてしりぞく心になれは、道の成就はなりがたけれは、初心のほとは先口なれんためにに、すら〳〵とよみならひて、工夫には渡るへからすと也、

扨又時〻にしめやかに案じてよめと。亡父卿もいさめ候ひし

瑞成聞書云、前にいへることく、初心のほどは、つねにはさら〳〵とよみならひて、さて又おり〳〵には心静にして案し入てもよむへき事そと、俊成卿」八二オの教へ置れたると也、平生にはやりかに斗よみならひては、又其くせかつきて、功成に一入案したる事もなくて、是もよろしからす、とかくけいこはさら〳〵とはやりかにもよみならひ、又一首に二三日も工夫するやうにもよみならふへし、かやうに平生よみなれ口なるゝ上にて自由自在は働らかるゝ也、されはけいこ一へんに覚えては然るへからす、臨気応変にいかやうにもしてけいこすへき事也、さて此とき〳〵には案してしめやかによみならへとの心は、是止観の入学功夫三昧の所にてなけれは心清浄ならす、さやうに清浄に心をすましてよまねは道は得かたしと也、定家卿は天台止観を通達にて、常に止観三昧の御心にて被詠と也、仍而御老」八二ウ後、法名をも明静と付給ふ事は、此止観明静前代未聞といふ法華経の妙楽大師の釈文より名付給ひしと也、されは哥道も此趣を思召、疎より細に入、細より疎に出つと書のこし給ひて、あまり案し過せは却而邪路になるゆへ、細より疎に入て、そろ〳〵と道に達すへしと也、あまりさら〳〵とのみよみならへは、哥に力なきゆへ、疎より細に入てそろ〳〵と道にすゝみ、細より疎に出て、入し力をぬいて、無我真実の境に至りて道を受得すへし、かやうに押返し〳〵功を達して哥道は成就する事そと、俊成卿の示し教へ給ひしとの事也、

はれがましき会始の時は。あまりに哥数多くよむ事不レ」八三オ可レ然歟。抑稽古も初心も用意同じ事にて候。百首などのよみ哥には。初心は四五首。已達は七八首。よきほどにて候べし

瑞成聞書云、晴の会席のとき、我哥よみかほに哥数多くよむ事よろし

からす、稽古よく足りたる人も初心の人も同意に心得へしと也、其中百首抔の会のときは、初心は四五首、功達の人は七八首ほとよむがほどよき也、

満私云、晴の会とは禁裏・仙洞及親王・大臣の家の会也、地下の人の交りの会にも、珍客上客若は貴人の差交るやうの会也、月次の会は平生稽古の為なれは、此沙汰有るへし、又百首会のときも、瑞成聞書の趣可然歟、大やう百首は人数定りたる上にて、功達には何首宛、其次何首、」八三ウ初心何首と宗匠か功達の人見合て、ほとよく題を分ちて出す也、

初心のほどはひとり哥をつね〳〵はやくも遅くも。自在に詠じならすべく候

瑞成聞書云、是は内証にての事也、はれの会のとき、難題又は曲題をとりて難義せぬやうに、つね〳〵はやりかにも又案してもよみならひ置て、自在を得るほとにけいこすへしと也、

満私云、初心のほとはひとり哥をとは、独吟に十首廿首乃至百首なとの題を出して、それをはやくも遅くも内々のみつからのけいこによみならへと也、或は寸線(ママ)に十首を詠し、又は一夜百首二夜百首」八四オなともよみならい、又は毎日一首もよみ、又は日々十首廿首、或は一時十首廿首なとゝいふやうに、無間断内々稽古しをくへき事也、かくけいこしをけは、晴の会又難題曲題なととりても難義ならす、自由を得る也、是かねて内々稽古の用意怠慢なきかゆへ也、満みつから入門の始より一両年已前迄、一夜百首は毎年不闕詠し、又寸線十首、毎日一首、一時十廿三十首迄も詠しならひたる也、此趣けいこの第一也、詠じすてたらん哥をは。左右なく人に散らし見する事。努〳〵あるへからず候

瑞成聞書云、日頃よみたらん哥は皆下地哥なれは、人にみせらるゝ哥にてはなきほとに、はれかましき時のうたの如く、ゆめ〳〵人にみすへからす、それを」八四ウ打散らして人にみすれば、人のわらひ草となりて、それより退屈出くるもの也、

いかにも未練のほどは。日頃詠じならひたる題にて詠ずべきよし申事にて候。煩らはしき題の。たやすくとりつきがたきは。いかにもわろかるべきにて侍り

瑞成聞書云、はれの会の時、未熟のほとは、日頃詠し習らひたるよみ安き題にてよむへしと也、むつかしくよみかたき題をとりて難義して哥出来かたき時は、退屈の心出くるもの也、されはとりつきかたき題は功者の人の安き題をとりたらんとかへてよむへき也、くせ題などは。ちとよみ。口なれて後。今はと覚えん時。又よみ」八五オならふべく候。難題などを手かけをせずしては不レ可レ叶レ候

瑞成聞書云、くせ題とはくせもの題也、或は蘭省花時錦帳下　盧山夜雨草庵中、なといふ詩の句題也、是も会席のときとりて難義せぬやうに常々よみならふへきと也、此詩句にて、

むかしおもふくさのいほりのよるの雨に涙なそへそ山郭公　俊成卿

かやうに和らかに艶に幽玄によみなすへき事也、又難題とは、池水半氷、

いけ水をいかにあらしの吹わけてこほれるほとのこほらざるらん

後京極摂政

臨期変約恋、

思ひきやしちのはしかきかきつめて百よもおなし丸ねせんとは

俊成卿

是等の類ひ、いつれも難題也、是等も平生手をかけ置て、よく〳〵つねに心かけ」八五ウをくへしと也、

歌をばかまへてたゞしく居てよみならふべく候。或は立ながら案じ。うつぶしてよみなと。身を自由にしてよみつけぬれば。晴のとき法式たがひたるやうにおぼえて。すべてよまれぬ事にて候

瑞成聞書云、常〻正しく座して歌をよみならふへし、身を自由にしてよみつけぬれは、法式たがひたるやうにて、はれのとき哥出来ぬもの也、哥を詠するには、目をほそく開きて、臍と鼻とひとしく、耳と肩とひとしく、舌を上のあきとにかけ、目を細く開きて心を閑かにする、是を止観明静功夫三昧といふ也、定家卿はかやうにしてよみ給へりとなり、水無」八六オ瀬殿御会の時、西行法師御殿の椽（縁カ）を歩行てよまれしを、人〻とかめて座に着してよませられけるに、其時の西行の哥はあしかりしと也、西行はつねに笠をもち杖をつきて立ながらよみならはれしゆへ、それか癖になりて、かゝるはれの会に難義せられしと也、又定家卿の作とて、鵜の本・鷺の本といふ書あり、偽書なれはとるにたらね共、暫く義例の為に爰にしるす、昔上東門院の御時、和泉式部正しく座してよまれしに、哥あしかりしと也、是は常に衣を引かつきてよまれしゆへ也、又蔵の命婦はくらかりにて読れしと也、是皆平生よみつけたる癖にて、晴の時難義する事なれは、常〻心得有へき」八六ウ事也、

満私云、此段和哥稽古の人、平生哥よまんとするときの行義を教へ給ふ也、西行・泉式部なといふ人はまことに上中古の哥仙なれとも、平生の癖によりて、晴の時難義せられける事も侍れは、初心入学のはしめより先哥よまん人は平生の行義を嗜むへき事也、是は哥には入らさる事のやうに常に思ひなす人有、かまへて〳〵内〻のけいこたりとも行義正しくけいこすへき事也、

何事も癖になりては。詮なき事にて侍るべし。よろづのわざは。たゞしざまのうるはしきをもて。よしと申事にて候。あからさまにも。座正しからずしてよむべからす。といましめ申候しに候」八七オ

瑞成聞書云、あからさまとは、白地と書く、かり初の心也、かり初にもとの心也、なにわさにてもくせになりては所詮なき事そと也、万事何事にても只其ものゝしざまのよろしきを以てよしといふへし、されはかり初にも哥の道は別して大事に思ひて、常〻兼而行義正しく形を崩さす、居ずまいよく、人の見下さぬやうに立振ふへしと、俊成の卿仰置れしと也、

又。哥の五文字は。よく思惟して。後にをくべきにて候

瑞成聞書云、哥の五文字はよく〳〵思惟して置へし、大事のものぞと也、定家卿もかね〳〵此事を仰置れて、哥の初五文字は人の面のことし、只初五もしによりて哥の善悪はみえ侍るとなり、たとへはよこれ

たる袴着たりとも、」八七面躰のうつくしからんは器量よき人と見ゆるやうなるかことし、それにて思ふへし、近代にも中院溪雲院通茂公は、古人の五文字ともを多く書集めて常に懐中し置て、会の時も是を見て初五文字をすへ給へりと也、是けいこの人の嗜也、

満私云、初文字はあしくをけは首切五文字といふものになる也、又初五文字は一首のかしらなれは、心ありてめてたきとみゆる哥も、なとやらん此初五文字のあらましかはとみゆるやうの事もあるもの也、一首詠作のうへにて、初五もし首尾よろしくかけ合ふやうにとくと見合せてをくへし、

されは古禅門も。哥ごとに五文字をは註のやうにつけ候ひし。」八八オ ある披講の時。此沙汰の出来て。されば何の心に哥毎に。初句のそばにかゝるらんなど。人〻不審し侍し返答に。五文字をは後にのみ書候程に。註のやうに候と申て侍しかば。満座一ふしある事聞えたり。とおもひげにて。色めきてこそ候ひしか。

瑞成聞書云、古禅門とは俊成卿の事也、俊成卿の哥をかき給ふに、初五文字をはいつにても註のやうに書給ひしと也、ある会の披講のき此さた有てとかめけるに、俊成卿の答へに、されは哥は初五文字か大事のものにて、中〳〵すへかたきものゆへ、いつにても案し返して、かたのことく跡にて書」八八ウ付候ゆへに、註のことくになり候と仰られしかは、満座の人〻不審はれて、けに道理のことかな、いか様平生かくのことく毎度遊はし候事いかゝと存せし処、けに一曲節ある事と、各感心し侍し事の候ひしと也、色めくとは、人〻感歎鼓動するやうの事也、

今にはかに勘へ申せば。さだめて髣髴きはまりなうそ候はんと。あさましきまでに思ひ給へながら。ひとへに愚訓をのみ守ると。其仰せ恭く候まゝに。左道のことゞもしるしつけ候

瑞成聞書云、今俄に勘かへ申せはとは、無思惟みつから思ふ事をすら〳〵と」八九オ書つけて参らすれはの心、早卒にして委細になけれはとの心也、さためて髣髴極りなうそ候はんとは、髣髴は、似たやうなる事にも用ゆ、又疎忽の心にも用ゆ、今爰にては疎忽の心也、麁相の事のみ多かるへしとの心なり、浅ましきまてに思ひ給へなからとは、ケ様に強〻敷はやりかに書付てまいらすれは、見くるしくあさましけなる事のみ書つゝけたるへく候へはとは思ひなからとの心也、思ひ給へなからの、給へといふ詞は、上様の人への挨拶の心も侍るへし、又かな文の一つの書法にも侍るへし、全くみつからの上へあかめたる詞にてはなし、此やうの疎忽の事を書付て進らするも、此内府殿、二条家一流の流義を御手練なされ度被仰付るゝゆへ」八九ウはゝかりをかへりみす、かく御執心のほとにめでかつは哥道御執心ふかき思召の恭なけれは、ケ様の事とも書つけてまいらすると也、ひとへに愚訓をのみ守るとは、偏にとは一向にの心也、定家卿の教へを只一向に御守りなさるゝよし仰下さるれはの心也、愚訓は、定家卿みつからの訓へ也、卑下の詞也、左道のことゝもとは、左様といふに同し心也、

相かまへて〳〵不レ可レ有二外見一候大躰愚老年来修理の道たゝ此條〻の外は全く他の用心なく候

瑞成聞書云、大躰は大やうの心也、十分のものは九分までとの心也、修理とは、修行の事をいふ也、みだりなる事とも書付候へは、相かまへて〳〵他の人の」九〇オ見るへき事ならねは、他見は無用に遊はし下されよとの心也、大やう定家卿年来哥道を修行なされて覚え給へる事とも、是に書付進せられ候より外の用意はなく、唯此和歌庭訓にて能〻心得て哥の道を守り給はゝ、邪路に趣す、哥道成就すへき事そと也、随分心底をのこさす書付侍り。かならず此道の眼目と思し召て。御覧せられ候べく候

瑞成聞書云、随分と心の底をはらひて余さす残さす書付進せ候まゝ、哥の道にて、人の眼目のことく、是をはなれてはかたき事そと思し召て、よく〳〵御覧して、此庭訓にて哥の道をよく〳〵御心得遊」九〇ウはされよと也、

あなかしこ

瑞成聞書云、あなかしことは、穴賢とかけり、恐ろしやあらおそれかましやといふ心也、定家卿の教の中にも、尤此庭訓抄は委細に教へ給ひて、是にもるゝ事なけれは、哥に心さしある人はよく〳〵拝見して、此おしへの外に出る事なかれと師説侍りし也、」九一オ

奥書

建武四年五月十日以彼写本ヲ楚忽ニ写書レ之、此庭訓者京極入道中納言令レ贈ニ故衣笠内府許ニ云〻、条〻之旨趣一〻甚深也、可秘〻〻

桑門凝念

文明九年三月五日以或秘本令書写之、和歌之秘伝、当道之奥旨也、雖為留布之抄、更不可処料爾者乎」九一ウ

特進源通秀

同十七年小春上九於燈下一時終功訖、彼本者中院一品通秀自筆也、依或人之尊言令書写之処也

桑門宗瑆在判

以異本令読合訖、可為尤証本歟

たれか見ん世に数ならぬみつくきの
あとははかなきすさひなりとも」九二オ

宝暦六年子六月下旬、右之以本写書之畢、并ニ細註ハ我師百花菴春山散東(蘭カ)長老御講尺之趣也、下官講筵之末席ニ侍座拝聴之趣記之、末段一日闕座、依之平井瑞成拝聴之以聞書補之畢

栗山満光

於春秋庵記之畢

付記

以下の事を知り得たので補足しておく。『堺市史』第三巻・本編第三（昭5・3堺市役所発行）に、江戸中期、堺の地に来寓した文化人の一人として百花菴春山に触れている記述が見える（674～675頁）。また同書第七巻・別編（同前）第一編「人物誌」の中に、本書「毎月抄聞書」に関りのある春山はじめ、栗山満光、半井瑞成（「医家」の項にあり）の出自・閲歴等が記載されている。

*

末筆ながら、本書の紹介と翻刻を快くお認め下さった上野理氏に厚く御礼申し上げます。